

第16回
「私たちと北方領土」作文コンクール
入賞作文集



(北方領土返還祈念シンボル像「四島のかけ橋」)

北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議

目 次

	1		
1 発刊にあたって……………	1	入選	黒部市立清明中学校 佐度 春佳……………
2 受賞作文……………	2	入選	黒部市立清明中学校 島倉 瞳……………
富山県知事賞		入選	黒部市立清明中学校 多賀 千咲……………
黒部市立明峰中学校 水野 桃綺……………	2	入選	黒部市立清明中学校 中陳 由加……………
北方領土問題対策協会理事賞		入選	黒部市立明峰中学校 木倉 菜南……………
片山学園中学校 佐伯 茜音……………	3	入選	黒部市立明峰中学校 小林 志逢……………
北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞		入選	黒部市立明峰中学校 中 柚希……………
射水市立射北中学校 佐村木百華……………	4	入選	黒部市立明峰中学校 森下 茜……………
富山県教育委員会教育長賞		入選	魚津市立東部中学校 島 詩月……………
黒部市立明峰中学校 奥村 真衣……………	6	入選	片山学園中学校 松井 琴音……………
富山県市長会会長賞		入選	高岡市立福岡中学校 飛田 玲那……………
黒部市立清明中学校 青嶋 沙季……………	7	入選	射水市立射北中学校 建部 夏希……………
富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞		3	入賞者一覧……………
黒部市立清明中学校 能登 優奈……………	8	4	作文コンクール(要項・応募状況・審査内容)……………
			(巻末) 参考資料……………

発刊にあたって

北方領土は、私たち富山県民にとって先人が開拓した大切な領土であり、本県に約五百人おいでになる元島民の方々にとってはかけがえのない故郷です。しかし、戦後七十七年が経過した今日においても、依然としてロシアによる不法占拠が続けられています。

「私たちと北方領土」作文コンクールは、中学生を対象に、北方領土という日本の領土でありながら、日本人が自由に往来できない地域があるという現実を正しく理解し、関心呼び起こすことを目的に実施したもので、今回で十六回目となります。

県内全域の中学生から多数の応募をいただきました。北方領土の歴史や富山県とのかわり、国際情勢、現在の交流の状況などを自分で調べるなど、興味と関心をもって学習している生徒が多いことに驚きました。この作文集は、そのうち十八編の入賞作品を掲載しておりますが、いずれも大変優秀な作品であり、北方領土問題の歴史的背景をしっかりと捉えていました。その上で、自分が体験したことをもとに北方領土問題の解決方法を考え、具体的に論述しています。どの作文からも、北方領土問題を身近な問題と捉え、若い世代が関心をもって問題の解決に取り組んでいかなければならないという意欲が感じられました。また、残念ながら、あと一歩で入選を逃された作品の中にも、きらりと光るすばらしい作品が数多くありました。

これらの多くの作品から、北方領土問題解決の希望を託すべき次世代の皆さんが育っていることがうかがわれ、喜びにたえません。また、こうした学習を通し、生徒が国際的な場でも活躍できる力を身に付けてくれるものと期待しております。

私ども県民会議と教育者会議においては、これまで県内の全中学校に教育用DVDを、また、県内の全小学校に小学生向け学習資料のCDを配付するとともに、元島民の証言を収録したDVDを冊子化した「四島は私たちのふるさと」を県内の全小中学校に配付してきたほか、令和二年九月には、元島民や関係団体の皆様の念願であった「富山県北方領土史料室」を黒部市に整備し、昨年入館者一万人を迎えました。この施設が返還要求運動の拠点となり、県内外の幅広い世代の皆様にご利用されることを願うとともに、引き続き、北方領土教育の一層の充実に努めていきたいと考えております。

おわりに、この作文コンクールにご協力いただきました多くの皆様方に改めて厚くお礼申しあげ、発刊の言葉といたします。

令和五年三月

北方領土返還要求運動富山県民会議

会長 渡辺 守人

富山県「北方領土問題」教育者会議

会長 寺田 恵

私にできることは何

黒部市立明峰中学校 三年 水野 桃綺

私は今年の夏、富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団の一員として根室市へ行ってきました。

富山県は北方領土からの引揚者が北海道に次いで多く、歯舞群島など故郷を追われてしまった人々がいると授業で学んだことをきっかけに興味をもち、参加しました。根室市の中学生との交流や資料館の見学などを通して、より北方領土について知ることができました。

納沙布岬では、北方領土の近さを体感するとともに、私たちの領土が今はロシアによって占拠されていることを改めて実感しました。地元中学生とは、北方領土問題を全国に広めていくために、私たちにできることを共に考えました。大人が何十年考えても未だに解決できていない問題について、中学生だからこそ柔軟に考え、よい意見を発表し合うことができました。他にも、国後島から実際にロシア人が泳いできた話や、日本人とロシア人が共に住んでいた時期は、言語の壁があったにもかかわらず仲良く生活し

ていたことなどを聞き、驚くことがたくさんありました。たくさんの貴重な経験をすることができた私は、総合的な学習の時間に北方領土についての学習に熱心に取り組みました。いろいろな調べ学習をしたり、講演などを聞いたりしていく中で、これからの北方領土問題解決のために、自分には何ができて、どのように行動すればよいかを考えることが多くなりました。今、ロシアはウクライナに軍事侵攻していて、それに対して日本のとった行動に不満をもったロシアは、一方的にビザなしの北方四島交流事業を停止してきました。このような強硬な対応は早期解決を妨げるものであり、とても難しい状況となっています。

そこで私は、問題解決のためにはまず、我々の意志を一つにして北方領土問題を発信していき、ロシア人との交流を盛んにするべきだと考えます。日本人の北方領土問題の認知は低く、難しいものだと思っている人が多いと思います。もっと北方領土についての授業や講演を普及させることで、将来を担う多くの若者たちに知ってもらうことができると思います。また、「北方領土の日」である二月七日を、もっと北方領土について考える日にするることによって、北方領土により関心をもつ人を増やすことができると思います。さらに、ロシア人との交流の場も増やしていきたいです。例えば、日本文化とロシア文化を互いに体験で

きるようなイベントがあるとよいと思います。このようなことを行えば、お互いのことを理解し、仲を深めることができるのではないのでしょうか。そして、それをきっかけに北方領土問題の早期解決につなげることができると思いますが。しかし、今ロシアはウクライナに軍事侵攻しているため、交流はとても難しい状態です。それでも私たちにできることを考えて、行動していくべきだと思います。

私が思いつくのはこんなことしかありません。でも、もしないままで前進するわけがないと思います。必ず解決できる日が来ると信じて、私はこれからも学び、考え、行動に移すということをしていきたいです。そして、北方領土返還を多くの人の力で成し遂げたいです。

北方領土問題対策協会理事長賞

北方領土問題を解決しよう！

片山学園中学校 三年 佐伯 茜音

北方領土問題は、どのようにすれば解決するのだろうか。

まず、考えられることは日露首脳会談の実施である。新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、日本の外交

活動は、ここ数年制限されてきた。それによって、海外の国々とのコミュニケーションが取りづらくなっているのではないだろうか。また、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、日本とロシアの間に不和が生じている。このように、難しい問題を抱えているときこそ、両国のリーダー同士が話し合い、平和的な問題解決について深く考えることが大切だと思う。

しかし、国のリーダーだけでなく両国の国民、そして世界中の人々が領土問題について積極的に考える必要があると思う。今までは両国が領有権を言い争っているような状態だった。そんなことを繰り返すだけでは、どんなに時間があっても解決しない。それどころか、両国の関係が悪くなるばかりだと思う。

そのため、私は両国の学生同士が交流し、北方領土問題について一緒に考える機会を作るべきだと考える。我々、日本の学生とロシアの学生では、北方領土について教育されてきたことは全く異なるだろう。このようにして、考え方や認識の違いにより、問題が大きく、そして複雑なものになっていく。交流を通し、双方の意見を比較して、みんなが考えをまとめる。このようにして出来上がったものは、双方にとって納得のいく、平和的なものだと思う。また、大人達からただただ植えつけられた考え方より、時代

に合った新しいものだと思う。

最後に、自分自身が、北方領土問題解決のためにできることを四つ考えた。

一つ目は、北方領土についての知識をもっと持つことだ。北方領土の歴史や、現在の状況を詳しく学ぼうと思った。

二つ目は、国際情勢に目を向け、広い視野を持てるようになることだ。日頃からニュースを見るなどし、国際問題についても時々考えたい。

三つ目は、言語学習に一生懸命取り組むことだ。やはり、自分の言葉でコミュニケーションをとることで、正確に情報を伝えることができると思う。また、国際交流を行う時にすごく重要になることだと思う。

四つ目は、思いやりの気持ちを持ち、差別をしないことだ。領土問題をはじめ、国際問題に向き合う時は、相手の国の文化や考え方を理解する必要がある。もし、相手を差別すれば問題を大きくしかねない。日頃から思いやりの気持ちを持ち、領土問題の解決と世界平和を望み続けたい。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

知ることが四島返還への第一歩

射水市立射北中学校 三年 佐村木百華

「知ることが四島返還への第一歩」この言葉を見た時、あなたはどお思いますか。

私は、今年八月七日北方領土返還要求根室市民大会に、富山県からの派遣団として参加させて頂きました。これはその時のスローガンでした。返還のために大臣の方、元島民の方々、根室市民が丸となって粘り強く返還運動を続けている姿が、とても印象的でした。その中でも特に印象に残った言葉があります。「どんな曇りの日であれ、晴れ間が見えない日があっても、それは決して太陽がなくなつたわけではない。同様に、今は困難しか見えないが、領土問題がなくなつたわけではない。」この言葉を聞いて、真実を突き付けられた気がしました。領土問題がこんな身近にあるのに、根室の方々との今私とでは問題に対する身近さに違いがあったのだと実感しました。報道はされていますが、この式典の前日にも北方領土からロシア人が泳いで根室にたどり着き保護したという話をされました。領土

問題は国と国の関係性や外交が絡み、正しく報道されるかは不明であり、報道がなければ知ることがない事実があることを知りました。そして、現在は北方領土元島民の平均年齢が八十七歳となりました。今後返還を訴え続ける人材が減っていくと、四島返還がより困難な状況になっていくのではないかと私は少し不安になりました。私は、北方領土返還を願うのではなく、返還してもらうために行動を起こさなくてはならないと思いました。

そこで、私はもつと北方領土を知るために、家に帰ってから「ジョバンニの島」という北方領土についてのアニメ映画を鑑賞しました。第二次世界大戦終戦直後、旧ソ連軍の北方領土占領によって故郷の色丹島を追われた一家を描いたお話です。戦後の理不尽な中でも、島民の少年純平が、旧ソ連軍将校の娘、少女ターニャと友情を育んでいく姿を見て、私は胸が締め付けられました。戦後の混乱がなければ、お互いの国や立場の違いに囚われず、ロシア人と日本人が一緒に仲良く暮らしていられたのではないかと、と悔しく切ない気持ちになりました。私が北海道で見た写真では、日本人とロシア人がお互いに肩を組み、皆笑っていました。そんな写真をたくさん見ました。戦争が起こるのは、どちらの国にもその国の正義があり、それを互いにつけ合うからだと思えます。例えば、現在起こっている、

ロシア軍によるウクライナ侵攻も同じです。ロシアにはロシアの正義が、ウクライナにはウクライナの正義があるのです。しかし、そんなことをしても誰も幸せにならないし、何の解決にもなりません。この映画を見て、同じことを繰り返してはいけなくと強く思いました。歴史は戻せないけれど、繰り返し返さないことはできると思います。

では、みんなが幸せに暮らすために、私たちができることは何でしょう。つまりそれが、「北方領土について知ること」なのです。今は日口間の現状から、北方領土に行くことはできませんが、ロシア人と日本人が北方領土を自由に行き来できる日を、まずは取り戻したいです。過去と現状を詳しく知ってもらうことが大切だと思います。日本に北方領土問題があり続ける限り、私たちは解決方法を常に考え、その問題と共に生きていかなければなりません。北方領土返還をより現実的なものにするために。

返還までの道

黒部市立明峰中学校 三年 奥村 真衣

日本には、固有の領土であるにも関わらず他国に実効支配されている地があります。それは北方領土です。日本が第二次世界大戦で敗戦したことがきっかけで、ソ連（現在のロシア）に占拠されてしまいました。もともと住んでいた住民の方々は、島を追われる形となりました。

私は、そんな北方領土について、学校での総合的な学習の時間の活動で調べてきました。調べる前は、北方領土とは北海道の北東にある四つの島のことであり、現在ロシアに占拠されているということくらいしか知りませんでした。しかし、学習活動を終えてから北方領土への見方が変わり、今後深刻な問題として扱っていくべきだと思うようになりました。また、調べるうちに、いくつかの疑問が浮かび、それらを詳しく調べることによって、自分の意見を広げることもつながりました。

疑問の中に「どうしてロシアは北方領土にこだわり占拠しているのだろうか」というものがありました。一言で言

うと「都合がよいから」になりますが、理由として大きく分けて二つ挙げられることが分かりました。

一つは、軍事についてです。ロシアの港は冬になると凍りやすいのですが、貿易等の面では凍らない方が当然便利です。また、軍艦や潜水艦のために国後水道や択捉海峡を確保すれば、いつでも太平洋に出られるという利点もあります。

もう一つは、経済についてです。北方領土周辺は漁が盛んで、「世界三大漁場」の一つに数えられます。水産物が豊富で、海底の石油などの鉱山資源も豊富にあるため、資源を得るために占拠したのではないかと言われているそうです。

現在の北方領土には、ロシアの方々が住んでいます。元島民の方々に話をうかがったときに、「北方領土に住んでいるロシアの人々は、私たちが歓迎してくれている」と言っておられました。つまり、北方領土問題については断固拒否、というわけではないことがうかがえました。

しかし、現在でも北方領土は返還されていません。疑問に挙げた理由のこともあり、ロシア側は返したくないのかもしれません。しかし、日本固有の領土である以上、日本には返してもらおう権利があると思います。

私は、一日でも早く北方領土が返還されればいいな、と思います。そのためには、まず北方領土問題を知ってもらうことが大切だと考えます。今を生きる若い年代には、北

方領土問題を知らない、または関心がないという人が増加しています。私たち中学生にできることは少ないかもしれないけれど、そんな人たちに少しでも北方領土を知ってもらえるように、まずは自分たちが見聞きして理解し、今の現状を変えていかなくてもはいけないと思います。私は、祖母と話をする時に、たまに北方領土の話題が出ます。夕方のニュースで北方領土について取り上げられていた時、ニュースを見ていた祖母が、「早く返還されて、日本に北方領土が戻ってくるといいね。」と言っていました。祖母も返還してほしい、という思いは同じなようです。一日一歩でもいいので、返還への道が近付いて、元島民の方々が生まれ育ったすてきな故郷を守っていければいいなと思います。

富山県市長会会長賞

北方領土の為に出来ること

黒部市立清明中学校 三年 青嶋 沙季

「ロシアは一四〇〇億円をつぎ込んで北方領土を開発している。」

これは学校で北方領土出前講座が開かれた際知ったこ

とです。私はこれを聞いて焦りと怒りを感じました。実は日本は領土問題解決の一環で北方四島からの患者の受け入れなど、北方四島在住のロシア人に人道的支援をしてきました。しかし、ロシアの北方領土開発によって日本の支援がいらなくなるらしいのです。北方四島在住のロシア人にとっては生活の質が向上して良いのかもしれないけれど、北方領土問題解決が遠くなるように感じ、私は複雑な思いでこの話を聞いていました。その後元島民の方からも話を伺いました。その中で「自由訪問で北方領土に行った時、草地だけなのに昔住んだ家があるように感じた。」という言葉にはっと胸をつかれました。そして北方領土返還が早く実現してほしいという思いが強くなり、込み上げてきました。

私たちは北方領土問題のために何が出来るでしょう。その一つに署名活動があります。出前講座によると、北海道では、さっぽろ雪まつり期間中に訪れる観光客等に対して北方領土問題への理解と関心を促すため、雪まつり会場内に署名コーナーを設置しているそうです。また、署名活動は全国各地で展開されています。国会に、より多くの返還への意志と想いを伝えるため、私も機会がある毎に参加したいです。さらに、この署名数はロシア側も見ているそうです。辛抱強く北方領土返還への想いを伝えるため、署名数がより多くなれば良いと思います。

一方で、ロシア側にも様々な考えの人がいます。現在の体制の考え方とは別の見方をする人々もいるようです。出前講座によると、その人たちは北方領土返還に前向きで、日本に納得いく形で北方領土問題が解決できることを願うと言ってくださる方もいるそうです。日本はビザなし交流という北方四島在住のロシア人と交流する事業を行っていますが、そこで親交を深めればやがて北方領土返還に前向きな方々が増えるかもしれません。ビザなし交流は無駄だと言う方もいますが、このような地道な交流の積み重ねがやがて北方領土返還に理解と関心を持ってくれるロシア人が増える第一歩だと思います。

出前講座ではまだたくさん学んだことがありますが一番印象的だったのは、アメリカの外交関係の偉い人でさえ北方領土のことをそこまで知らなかったということです。これを聞いて国外に情報を発信することの大切さを感じました。今はまだできないかもしれないけれど、大人になったら外国語で北方領土問題の正しい情報を発信したいと思います。そのために、継続して北方領土問題に関心を持ち続け、正しい情報とその時々状況把握をしていきたいです。このように、世界の人々に日本固有の領土である北方領土の存在を知らしめ、一日でも早く日本に北方領土が返還されることを願っています。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

北方領土問題の未来

黒部市立清明中学校 三年 能登 優奈

北方領土問題というのは、島が返ってこないことだけが問題ではない気がします。現状を踏まえ、私たちが北方領土問題を諦めてはならない理由は、二つあると私は考えます。

一つ目は、ロシアから一方的な武力による侵攻をされたことです。一九四五年八月十八日、戦争が終結してたった三日後の日本に、ロシア軍は攻めてきました。アメリカ軍が居ないことを知ったからです。侵攻は九月五日に終わつたとされていますが、領土に島民が居なくなつただけであつて、条約を破り、島民に銃を突き付けていたという恐怖は、七十七年たった今も元島民の方の心の傷として残っています。

北海道近海でのコンブ漁の制限を知っていますか？私は今年の夏、北方領土青少年等現地視察事業に参加し、そこで初めて、この事実を知りました。漁師は毎年ロシアと交渉し、目的や何kg採るのかまで聞かれた上、多額の許可料を支払っているそうです。もちろん誰も支払いたくありません。

せん。まるでロシアの領土、領海だと認めてしまうようだからです。けれどロシア兵に監視されながらする漁は、常に銃を向けられている状態であり、命を保障するための「安全料」を支払わなければならないのです。私が「許可料」ではなく「安全料」という言葉を現地の方から聞いた時、私は怒りと申し訳ない気持ちで一杯になりました。コンブを食べる日本人が漁をしているだけなのに、コンブを食べないロシア人が、領土だと誇示するためだけに、武力で脅すことへの怒りの気持ちと、私を含め富山県民がこのコンブを沢山食べているのに、この事実を知らなかったことに対して申し訳なく思いました。

もう一つは、交渉がなかなか進まないことです。何が起きているのかというと、国民の北方領土問題への関心や協力しようという気持ちが年々薄れていっているのです。北海道羅臼の魚屋さんに、いきなり声をかけられました。優しく「どこから来たの?」と聞かれたので、視察事業の事を話しました。すると急に深刻な顔に変わり、北方領土の返還は無理ではないかと話されました。現地の人でも、そのように考える人もいるのかと思つたのと同時に、おそらくこの魚屋さんは、子供の頃からずっとある問題で、未だに解決へと進んでいないから半ば諦めているのではないかと思いました。

けれど知って欲しいのです。領土問題の解決には、長い年月がかかることを。イギリスとスペインの領土問題は解決に三百年近くかかったと聞いたことがあります。北方領土問題も、長い目で見て、私たちに出来ることを止めないことが大事だと思います。私たちにも出来ることは、内閣府に提出する署名活動への参加や、北方領土の文化や歴史、問題を一人でも多く広めることです。ロシア人との交渉、交渉を続けるのは、島民や二世だけではなく、若い私たちだと思います。

入 選

突然の戦争と四島の返還、私の願い

黒部市立清明中学校 三年 佐度 春佳

「ウクライナとロシア、戦争するんだって。」突然始まった戦争。私は、日本とはあまり関係ないと思っていた。けれど、これが北方領土問題に大きな影響を与えていた。

清明中学校では、三年生になると総合的な学習の時間に北方領土問題について学ぶ。それまで私は北方領土について北海道の近くにある四島という場所くらいしか知らな

かったが、富山県、特に私が住む黒部市には元島民である人々が多く住んでいるようだ。私は、現在「北方領土問題について他国、日本・ロシア国民はどのような思い、考えをもっているか」という課題をもって学習に取り組んでいる。

学習が始まってから、北方領土問題に関わるニュースを見かけたらメモを取るようになっていた。そんなある日、テレビをなんとなく見ていたら一つのニュースが目にとまった。それは、北方四島への「ビザなし交流」等の日本との合意をロシアが一方的に破棄したという内容だった。私は衝撃を受けた。そして、それはなぜなのか詳しく知りたいと思い、ネットを使って調べてみた。なぜロシアがそのような行動を取ったのか。そのサイトには、ウクライナ軍事侵攻による日本政府が科した制裁に反発したからと書いてあった。それを見て私は、北方領土の返還が遠のいてしまったんだと悲しくなった。日本から遠く離れた場所であるロシアとウクライナの戦争もたらしたものだ。それは、私たち日本国民にとつてとても大きなものだったのだ。この時、初めて気づいた。

私は、北方領土問題の早期返還を望んでいる。年々高齢化が進み、減少していつている元島民の方々のためにも、北方領土を詳しく知らない子ども達のためにもそう考える。しかし、現在のロシアとウクライナの戦争が続けば続けば

ど、それが難しくなっているように感じる。けれどそんな今だからこそ、我々が声を上げ続けなければならない。そして、私達が少しでもできることをしていかなければならないと思う。先日、中学校に来校し講演してくださった根室高校の方々が署名活動をしていることを紹介してくれた。小さなことでも積み重ねれば、継続していけば、いつかは私たちの望みは実現される。私はそう信じている。

また、私は北方領土の返還に向け、現在、日本とロシアの間にある北方領土問題の平和的解決を望む。私もいろいろなメディアを調べて、最近知ったのだが、他国や一般のロシア国民はこの問題について少ししか知らない、または全く知らないという人がほとんどらしい。また、色丹島在住のロシア人は、「日本の領土になると急に日本人の移住が進むと思う。私たちにも島での思い出があるからロシアから日本へ返還しないほしい。」と言っていた。逆に、元島民の方々からも、「ふるさとに墓参りすらできない辛さがある。」ときいた。北方四島が日本に住む元島民の方々にとつて故郷であるように、ロシア人にとつても故郷であるのだ。だから、双方のそのような意見も視野に入れた解決を望んでいる。

終わりの見えない戦争と遠のいていく四島返還。どちらも早期解決することを願っている。また、ウクライナの大

入 選

統領は自国の領土は自国のものだと声をあげた。私達、若い世代も北方領土は日本の領土だと声を上げ、世界へ伝えよう。どうか、僕らの四島の、故郷の返還を。

北方領土について学んで

黒部市立清明中学校 三年 島倉 瞳

北方領土は返還されるのだろうか。こう、誰もが一度は思ったことがあるだろう。私は北方領土について学んでいくうちに何度もその疑問が頭に浮かんだ。

黒部市は北方領土と関係が深く、私は昔から北方領土について学んで来た。そして、今年は学校で北方領土学習があり、私は北方領土の講演会に参加した。

まず、神戸学院大学の岡部芳彦先生のお話を聞いた。北方領土サブカルチャー交流というロシアと日本の若者の交流が行われていることや、北方領土の現状、実際に北方領土に行った今までの経験等、様々なことを教えてくださった。私は今も北方領土との交流があること、世界やロシアの人々は北方領土問題を知らないことにとっても驚いた。沢

山の人々に知られているが、解決されない問題だという考えが覆された。私たち一人一人が世界にアピールしていくことが大切だと分かった。また、他国には領土問題が解決した例があることを知り参考になるかもしれないと思った。

北海道の根室高校では、北方領土返還に向けて署名活動や出前講座、北方四島についてのラジオ放送などが行われている。特に署名活動は、北海道を始めとする全国各地で行われている。北方領土は私たちの財産なのだ。それは「日本固有の領土」という明白な事実が示しているのだ。

しかし現在、北方領土はロシアによる不法支配が続いている。日本の船は北海道根室沿岸からわずか一・八キロメートルまでしか許されていない。日本人は北方領土に立ち入ることだけでなく近づくことさえできないのだ。私はそれはとても悲しいことだと思う。返還を実現するために様々な活動がある一方で、効果がないため返還運動に参加する若者が減少しているようだ。それは、ロシアの北方領土の占領を日本が認めること、この問題の風化に繋がってしまう。私はそれは防がなければならないと思う。私たちが北方領土に関心をもち続け、返還運動をやめないことがとても重要だと思う。

また、元島民の方々が年をとることで北方領土問題を伝

承する人は減少している。その中で元島民の方々のお話を聞くことができたことはとても貴重な経験だったと思う。

元島民の方のお話はこれまでの講演の中で最も深く心に残った。北方領土はふるさとで思い出の沢山詰まった大切な場所だということが私の心にひしひしと伝わってきた。私が話を聞いた吉田さんは、当時、生活が苦しく水晶島に春から秋まで出かせぎに家族と行っていたそうだ。昆布業のことや島の人々はお互いに助け合って暮らしていたことなどとても懐かしそうに話してくださった。吉田さんは、平成十五年に一度水晶島を訪れたが、懐かしいけれど、さみしい気持ちになったとおっしゃっていた。草が伸び、荒れて、元々の美しさは人がいないため失われていたとおっしゃっていた。

私は、北方領土は私たちが返還運動を続けていく限り、興味・関心をもち続けている限り、元島民の方々の想いを伝え続ける限り絶対に返ってくる時が来ると思う。そのためには私たちが北方領土を知り、日本から世界へ訴え、後世に伝えていくことが必要不可欠である。私も、もっと北方領土について知ることから始めたいと思う。

入 選

北方領土問題と向き合おう

黒部市立清明中学校 三年 多賀 千咲

北方領土問題とは、今日日本が抱えているロシアとの領土問題のことだ。これは第二次世界大戦後から始まった問題で、七十七年の間解決されていない大きな問題である。七十七年も経っているということは、北方領土に住んでいた元居住者の方達の平均年齢は徐々に上がっているということだ。これは北方領土問題を解決するための課題の一つである。

このとても長く続いている北方領土問題の解決のために、日本では今北方領土返還要求運動を行っている。これの主な活動は、二月七日の北方領土の日の設定や署名活動などだ。また私の住む富山県でも意見交換会やセレモニーなども行っている。

私はこの返還要求運動の一つである北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団に参加した。この派遣団では、北海道の一番東で一番北方領土に近い納沙布岬から貝殻島にある灯台や国後島の爺爺岳を見ることができた。また北方領土

返還要求根室大会に参加し、根室で北方領土の返還を願うたくさんの方の声も聞くことができた。その声はたった一つ、「早く北方領土が返ってきてほしい」だった。これは北方領土問題を知っている日本人なら誰もが思うことだろう。

しかし、この声を上げている人達の願いが現実になるには、元居住者の平均年齢が上がっている他に課題が二つある。それは、若者の返還要求運動への参加の減少と、ウクライナ戦争の影響でロシアとの交渉がとて難しい状況にあるということだ。今若者の北方領土問題への興味が関心が弱まっているという。その理由は「返還要求運動をして北方領土がなかなか返って来ないから」だそうだが。しかし、こういった若者が増えていくと、北方領土問題に対して声を上げる人がいなくなる。すると北方領土はロシアの領土だと認めたことになってしまう。またウクライナ戦争によって日本の声がロシアに届きにくくなっており、返還運動をしても北方領土問題につながりにくくなっている。

けれど、これらの課題がある中でも「祈りの火」の合言葉にあるとおり、「北方領土返還運動の火を絶やすな」つまり、声を上げ続けることが大切である。これは署名活動などの返還要求運動への参加や、SNSでの発信などどのような形でもいい。どのような形でもいいから、北方領土

返還を願う人が一つになりロシアに訴え続けることが一番大切なのだ。

そのために今、私ができることは、今回の北海道派遣団で経験したことや、学校での北方領土講演会で聞いた根室の中学生や元島民の方の話を、自分の中で理解し、自分の言葉で、まわりに広めていくことだと思う。私は今回北海道派遣団の一員として北海道に行った。しかし今後はなかなか北海道に行って、現地で返還要求運動をすることはできないが、自分の住んでいる富山でもできることはある。私は、それを継続して行っていく、日本固有の領土が一刻も早く返ってくることを願っている。

入 選

学び、考えた北方領土返還問題

黒部市立清明中学校 三年 中陳 由加

私は今年、北方領土青少年等現地視察事業に参加し、八月に北海道に行った。遠い存在だと思っていた北方領土とその問題だったが、北海道での体験を通して身近な問題と感じ、自分も返還運動に携わっていきたくて強く思うよう

になった。

北海道での体験は貴重なものばかりだったが、特に印象に残っていて忘れられないことがある。

まずは北方領土が想像以上に近いことだ。肉眼ではつきりと見た島々は大きくて、建物もいくつかあった。また、島の周りを巡回しているロシアの大型船も望遠鏡で見えた。それを見たとき、私はロシアに対する疑問と怒りを感じた。目と鼻の先にある領土が七十七年経った今も返ってこない。これまで多くの人々が返還を訴えてきたというのに。交渉も交流も地道に続けているのに、なぜ返還されないのか、と北方領土問題を知れば知るほど疑問と怒りが込み上げてきた。

今回の事業では、元島民の得能さんと石垣根室市長に講演をしていただいた。私はその講演を聞いて、北方領土問題とロシアに対する考え方が大きく変わった。

得能さんは色丹島出身で、戦後三年間の学校生活をロシアの子供と過ごし、現在はビザなし交流でロシア人との交流を続けている。今回の講演で得能さんは、「ロシアを敵にしてはいけない。ロシア人によって、この問題に対する意見はそれぞれ異なる。ビザなし交流で学ぶロシア人もいるから。」とおっしゃった。初めて聞いたことだった。ロシア人は皆同じ考えを持っているのだと勝手に思ってい

た。また、石垣根室市長も、ビザなし交流で仲を深めた日本人とロシア人が今も連絡を取り合えることやロシア人が積極的にビザなし交流に参加してくれることなどを教えてくださった。日本とロシアは仲が悪そうないメージだったため、とても意外だと思った。一概に全てのロシア人が反日感情を抱いているとは限らないことを忘れないでいたい。

他にも講演会では、元島民の高齢化、ウクライナ事情やコロナの影響で中止が続くビザなし交流やお墓参りなどが原因で、北方領土問題への関心が薄まっていくのではないかとという心配もあると聞いた。私も強く共感した。こんな時こそ、私たちが情報収集をし、広めなければならぬと思った。北方領土問題を詳しく知っている人は少ない。実際に私も知らないことだらけだった。だからこそ返還運動の輪を広め、国民が丸となって日本国内、そしてロシアに返還を訴えていく必要があると思う。自分にはこの問題を伝えていくことしかできないが、一日も早い解決を願って声をあげていきたい。

誰かの故郷

黒部市立明峰中学校 三年 木倉 菜南

共生。この言葉は異なる種類の生物が共に生活することを指す。私はこの言葉を実現することの難しさを、北方領土の話を知ってからよく考えるようになった。

一九四五年九月、私達の先祖が大切に築いてきた四つの島での生活がソ連軍の不法占拠によってうばわれた。その四つの島が北方領土だ。七十年以上経った今でも一つの島も返ってきていない。私は、中学校へ入るまで北方領土の存在を知らなかった。だが、歴史の授業で北方領土の話を知り、総合的な学習の時間に調べ学習をしたりして、いろいろなことを知った。その中で私は気になったことがある。それは、北方領土が返還された後のことだ。ただ返還されるだけでは解決にはならないのでは、と。始めは、早くロシアが北方領土を返還し、元島民の方や関係のある人々が帰ることができるようにしてほしいと思っていた。だが、同時に、追い出されたロシアの人々はどうなるのだろうかとも思った。本来通り日本の領土として引き渡された

としても七十年以上も経っていれば島で生まれ育った子供もいるだろう。その子供にとって北方領土が故郷となるのではと考えるようになった。しかし、北方領土は日本固有の領土であり、元島民の方々の故郷でもある。考えれば考えるほど難しく思えた。

その後、学校で元島民の方や島民二世の方についてたくさんのことを聞いた。そして私の知らなかった北方領土についての話や、ロシアの北方領土に対する考え方などを知った。それは、私にとってとても衝撃的だった。私は、ロシア人を追い出さず、共生・共存することが良いのではとも考えていたが、ロシアとの関係が悪化している今、これはかなり難しく、ほぼ不可能だと思った。共生・共存するとなったとき、日本とロシアどちらの法律で生活しているのか。何か問題が起きたとき、ロシアと日本どちらが解決するのか。たくさんの問題点が出てくる。そうになると、やはり返還してもらい、日本固有の領土だと胸を張って国民が言えるようになるべきなのだと考えるようになった。

もう一つ、不思議に思ったことがある。それは、ロシアはなぜそれほど北方領土を必要としているのかということだ。調べてみると、ロシアは気候の問題上、北方領土でできる漁がとても貴重で必要なのだと分かった。しかし、そこからといって不法占拠していい理由にはならない。そこ

で、日本の領土として返還されたら、北方領土で条件をつけてロシアも漁ができるようにしたらいいのではないかと考えた。そうすれば日本の元へ北方領土は返還されるし、ロシアも漁ができる。実際はそんな簡単な話ではないかもしれないけれど、方向性の一つとしてあってもいいと思う。

北方領土不法占拠から七十年以上が経過し、元島民の方はほとんど減りつつある。一日でも早く、一人でも多く、島へ戻るようにしてほしい。だからこそ、日本全体が北方領土は日本国民の島だということを認識し、語りかけていくべきだと思う。

入 選

北方領土への想い

黒部市立明峰中学校 三年 小林 志逢

「北方領土って何だろう。」

総合的な学習の時間、この質問を投げかけられたとき、私はうまく答えることができませんでした。「どこにあるのか」はわかるものの、「何だろう」と聞かれたときの答

えは分からなかったのです。その後、北方領土問題の学習をするにあたって、まずは自分自身がよく知り、理解することが大切だと思い、北方領土について調べ始めました。

北方領土とは、北海道の北東部に位置する択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々のことだということ、そして日本固有の領土であるにも関わらず七十七年間、ソ連、ロシアによる不法占拠が続いていることなどをインターネットで学習したことで、私は北方領土とは何か、そして、北方領土問題とはどんな問題なのかを理解できるようになりました。いいえ、理解できていく気になっていくのです。

夏休みのある日、私は北方領土史料室へ行きました。富山県黒部市にあるこの史料室は北海道以外では自治体レベルで初となる北方領土啓発施設であり、富山県と北方領土の深い繋がりが感じられる施設でした。そこには北方領土特有の品や遺留品、中にはすすけた家族写真なども展示されており、とても現実味のある歴史を感じました。それらを呆然と見ていると、ある一組の老夫婦が入ってきました。その時に入場していたのは私一人だったため、気にも留めませんでした。そろそろ帰ろうと思い、老夫婦とすれ違うようにして出口へ向かおうとした、その時です。おじいさんが大きく崩れ、展示物に倒れこみました。最初は体

調不良かと思いい、声をかけようと思いましたが、違いました。弱々しく崩れた体とは裏腹に、おじいさんの目は強く、悔しそうに一つの家族写真を見つめていたのです。それを見て私は、何をすることも、言うこともできませんでした。むしろ、今まで見たことのない未知の何かを見たような気持ちになり、胸が苦しくなりました。

私たちにできることは、一体何なのでしょう。私は第一に、「知る」ことだと思います。北方領土が不法占拠されてから七十七年もの月日が経ちました。これからはよ、真実を伝えていくことができる人が限られてくることでしょう。現在に生きる私たちがその中でできることは、北方領土について正しく知り、伝えてもらうのを待つのではなく、自ら伝えることを意識しながら学習することだと思います。次の世代へ、さらに次へと想いや真実を伝えていくことで、一刻も早く北方領土が返還されることにつながると思います。

できることの二つ目は、「日本国民一人一人が他人事だと思わず、身近なことだと自覚する」ということです。確かに二国間での問題であり、壮大すぎて関わりにくい、と感じる人も少なくないのかもしれませんが、しかし、そのような大きな問題だからこそ、一人一人が興味をもって団結すべきだと考えます。必ずしも積極的ではなくても、常に

身近なこととして捉えていくべきだと思います。

どれだけ私たちが北方領土問題について学んでも、当事者の方々にしか分からないことは必ずあります。史料室の帰りに感じたあの気持ちはきつと、私たちが完全には理解できないことへの虚しさや悔しさだったのだと思います。その中で私はできることを精一杯していきたいです。みなさんもまずは身近な人と北方領土について今一度話し合ってみてはどうでしょうか。

入 選

大切な故郷

黒部市立明峰中学校 三年 中 柚希

昔、北方領土には、約一万七千人の日本人が暮らしていました。暖流と寒流が交わる影響で、水産資源が非常に豊かで、多くの人が漁業を営んでいました。富山県からも、出稼ぎのために家族で北方領土に渡る人達があり、島で暮らす子供の中には、あまり学校に行かず、家の漁業を手伝う人もいたそうです。主な産業となっていたコンブ漁は、辛い作業が多く、足をとられると命を落とす可能性もあつ

たと、島民二世の方がおっしゃっていました。大変な漁業の仕事と、電気もない、医者もない生活。それでも、自給自足に近かったため、生活は安定していたそうです。地域の人たちは仲が良く、誰かが出産するときは、経験のある人たちが手伝うなど、助け合いながら生活していたと聞きました。

しかし、昭和二十年八月、その生活は終わりを迎えます。ソ連軍は北方領土に侵攻すると、銃を持って民家に押し入り、腕時計や万年筆を略奪しました。その後、ソ連の民間人が移住してくると、日本人の家を半分に仕切って住むなど、日本人の生活は不便になりました。ソ連人の中には友好的な人もおり、仕事を分担して一緒に働いていました。しかし、そんな共同生活も長くは続かず、昭和二十三年までに、全ての日本人が島を退去させられ、今もロシアによる不法占拠が続いています。

私は、小学生の頃から北方領土のことを知っていました。が、ここまで詳しく学習したのは今年が初めてでした。今までは、「自分にはあまり関係のない話だ」と思っていたので、富山県からも出稼ぎに行く人がいたと知り、驚きました。その後家族から、私の祖先も北方領土に住んでいたことを聞き、自分も無関係ではないと思うようになりました。

総合的な学習の時間で、当時の北方領土での生活について調べるうちに、それまでの生活と、大切な故郷を奪われたままの人がいることに対して、悲しい気持ちになってきました。私は、自分が住んでいる地域が、そして富山県が大好きです。自分が何年も過ごしてきた場所から急に追い出されて、もう帰れなくなることを想像すると、とても辛いし、そんなことはあつてほしくないと思います。一刻も早く島民の方の大切な故郷を、返してほしいと思います。

しかし、現在北方領土では、ロシア人が生活しています。ソ連が不法占拠を始めてから、既に七十数年が経過しており、北方領土を故郷だと思う人は、日本人だけでなく、ロシア人の中にもいます。もし北方領土が日本に返還されることになれば、たとえ日本固有の領土だといっても、ロシア人の故郷を奪うことになりかねません。

一時期は、島に住むロシア人の方から、日本人と一緒に暮らしたいという話が出ていたこともあるそうです。しかし今では、その話はなくなりました。また、元島民の方々の年齢も高くなり、もし返還されても、実際に住むのは難しいというお話も聞きました。どのような形になるかは分かりませんが、元島民と現島民の両方が、納得できる解決策が見つかればいいと思います。

年に数回あった北方領土への訪問は、現在、新型コロナウイルスやロシアのウクライナ侵攻の影響で、行うことができなくなっています。元島民の方の中には、祖先のお墓が島にある方もいらっしゃいます。故郷に帰ることができない数少ない希望を、どうか絶たないでほしいと思います。戦争がもたらすのは、人の死と、その後長く続いていく問題だけです。何もいいことはありません。北方領土問題の解決を、そして、全ての人の大切な故郷が、守られる世界になることを願っています。この願いを叶えるためにも、まずは自分が学んだことを、一人でも多くの人に伝えていこうと思います。

入 選

元島民の方々の願いを叶えるために

黒部市立明峰中学校 三年 森下 茜

「北方領土」と聞くと、すぐに思い浮かんだのは学校給食でした。小学校のころから、定期的に北方領土がテーマにされた給食を食べる日があり、その都度北方領土について先生から説明を聞いていました。当時の私は、「もともと

とは日本のものだったのが、外国にとられてしまったんだな」程度の少ない知識しかなく、あまり深く考える機会もありませんでした。

しかし、中学生になり、小学生の時よりもさらに詳しく地理や日本の歴史を学ぶと、北方領土に対して感じるものも強く、大きくなっていきました。

日本がポツダム宣言を受け入れ、戦闘をやめたあとから、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島をソ連が占拠しました。ソ連がロシアとなった今でもまだ返還されていません。

先日、学校で元島民や二世の方に話を聞く機会がありました。占拠される前の北方領土はとても自然が豊かで、本州から離れているため生活で困ることも多かったものの、住民どうし支え合って生活をしていたそうです。コンブ中心の漁がさかに行われ、私の住む富山県からも漁師として働きに行った人もいたそうで、北方領土と富山県のつながりは深いものだったんだと思うと、おどろきと共に感がい深いものを感じました。

キタキツネやゴマファザラシ、オットセイ、オジロワシなど、私たちが住む地域ではなかなか見られない動物も生息しており、かなり身近に動物がいる暮らしだったと聞きました。

また、元島民の方が、漁に出る親たちの背中を見て育つ

たことや、島をかけまわり娯楽が限られた環境のなかでのびのびと生活していたことなど、様々な思い出をなつかしそうに話してくださったことに感動すると共に、故郷をいきなり奪われる苦しみを想像して怖くもなりました。

明治時代、鎖国がとけたことにより外国との関わりが増え、やがてそれは領土を求めた対立へと変わっていききました。二度の世界大戦を経て、日本は多くのものを失い、学び、今日私たちがこうして平和に生きていけるまでに復興しました。

しかし、北の大地では、戦後からの熱い思いを絶やすことなく闘い続けている人々がいるのです。昭和四十五年から北方領土返還に向けての署名活動が始まり、北海道の雪まつりなどの大きなイベントに合わせて署名に参加できる機会が増えてきています。二〇二二年十一月の時点で、もうすぐ一億を超える署名になるという話を聞きました。いきなり北海道まで足を運ぶのは難しいと思いますが、まずは身近な人に北方領土について知識を深めてもらうのが、始めの一步として実行しやすいように思います。

今、ロシアとウクライナ間で起きている戦争が深刻な事態となっています。それにもなつて、日本とロシアの関係も悪化している状態です。この事態を見て、「もし島が返ってきたら、その地を踏み、肌で感じたい」と話してく

ださった元島民の方の言葉が私の頭に浮かんできます。この島民の方々の願いを必ず叶えるためにも、今を生きる私たちが思いを繋げていけるように、正しい知識を身に付け、伝えていくことを大切にしていきたいと改めて思いました。

入 選

思いをつなぐ役目

魚津市立東部中学校 一年 島 詩月

「日本とソ連」から「日本とロシア」に変わっても、七十七年という長い年月が経ち、国民同士が自由に交流できる時代になつても、北方領土は返されていない。

私は今年の夏、「北方領土青少年等現地視察事業」に参加した。そして、この目で北方領土を眺めてきた。北海道で元島民の方の話を聞いたり、富山県北方領土史料室を訪れたりするなかで七十七年という長い時間とともに当時を知る人も、関心をもつ若い世代も少なくなつてきているという深刻な事実を知った。時間が経つほど元島民の数は減り、「北方領土について伝える人がいつかなくなつてし

まうのではないか」元島民の方々ですら、そう思わざるを得ない状況にあると考えると、心が痛んだ。

北方領土は、古くから日本人が苦勞を厭わず開拓してきた、大切な日本の領土である。富山県からも多くの人が出稼ぎに行き、北方領土のコンブ漁を支えた。そんな日本人の努力と知恵がたった四島が突然ロシアに占領された。理由もなく故郷から追い出された人々、そして故郷に帰ることのないまま亡くなっていかれた方は、どんなに辛い思いをしたのだろう。北海道にある四島のかけ橋の下で燃え続ける「祈りの火」からは、先人達の熱い思いや、努力が伝わってくる。

視察では、元島民の方の話聞いた。今まで自分が住んでいた家も、食べていたものも、全てロシア人に奪われ、急に入ってきたロシア人の世話をしないといけない。「騒いだら殺されるから」子どもにも当たり前のようにそう伝えられ、島民は我慢しながらもしばらく島に残り、辛い日々を送ったそうだ。思い出がまった故郷を離れる、という決断は、決して簡単にはできないと思う。それでも島民は限界を感じ、やむを得ず島を出た。「島を一度出たら、もう戻ってこれないのではないか」「故郷がこのまま奪われたら…」島民の恐怖は現実になってしまった。「故郷に戻れない」ということが、どんなに辛くて苦しいこと

か、それは体験した元島民にしか分からないものだと思う。だが、元島民の人数は現在五千五百人を下回り、平均年齢は八十七歳だ。元島民の方々だけでこの問題を解決するのは難しい。

解決に必要なのは粘り強い交渉、そしてそれを支える国民の強い支持である。国民全員力があれば、きっと交渉は成功すると思う。元島民は皆、そんな希望を持ち、私達若い世代がいつか島を取り戻してくれることを何よりも願っている。私達には、古くから北方四島にお世話になった富山県民の一人として、元島民の方々の思いを受けとめ、それに応える責任がある。私は視察を通して、この問題に力を尽くしてきた人々の努力を無駄にしたいと強く感じた。そして、視察に参加した私だからこそできることを探していこう、と思った。

私は今年、北方領土問題に対しての自分の役目に気がついた。それは「思いをつなぐ役目」だ。元島民の方に直接話を聞いたことはとても貴重で大切な経験だ。そんな経験ができた自分だからこそできるのは、いつか島は戻つてくると信じて、そして、元島民の思いが一日でも早くロシアに届くことを願って、「思いを受け継ぐ」こと。これからは、私達が元島民の代わりになって、北方領土への思いをいつまでも残していきたい。

北方領土と私

片山学園中学校 二年 松井 琴音

北方領土について、私は何を知っているのだろうか。四つの島の名称は言える。またロシアが占拠している事は知っている。ただそれだけだ。この作文を書くまで、北方領土問題について考えた事はなかった。

私は愛知県で生まれ育ち、中学入学と共に富山県に来了。地元の小学校では、北方領土について詳しく学んだ事はない。しかし、ここ富山県では北方領土と深く繋がりがあり、学校でも詳しく学ぶ機会があるようだ。縁があり、富山に来たのだから、私は北方領土について、調べてみる事にした。

北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島をはじめとする島々のことだ。北方領土は日本人が苦勞して開拓した土地であり、そこで生活し受け継いできた島々だ。そして国際的にも認知されている日本固有の領土だ。北方領土には、かつては一万人以上の日本人が暮らしていた。一九四五年に日本がポツダム宣言を受諾したあと、戦争の

混乱に乗じたソ連軍によって攻撃され占領された。そこに住んでいた日本人は家を没収され、強制的に退去させられたのだ。そして約八十年近くが経つ現在もその不法占拠が続けられている。日本であるが、日本人は誰一人住んでいない。富山県から、多くの人が出稼ぎで北海道から歯舞群島に移り、コンブ漁場を開拓した。そして「越中村」と呼ばれる村ができるほどだったようだ。そんな訳もあり、富山県は全国で北海道に次いで二番目に引揚者が多い。故郷の富山を離れてまで一生懸命に開拓した場所を急に奪われた方々の気持ちを考えると心が痛む。

北方領土は不当に奪われた土地なのだから、奪い返せばいいと言うのは簡単だ。しかしここまで交渉が進まない状態で、もう北方領土で見られる風景はロシアのものになってしまったようだ。だから、奪い返して、今生活しているロシアの人に同じような経験をさせてはいけない。今できる事は、ロシアと日本が共に北方領土を大切に繁栄させていく場所とする事こそが、一番だと思う。北方領土は、日本とロシア、二つの国の人々の故郷となるのだから。

元島民の方々が高齢となり、少なくなってきた今、風化させないよう、まず、ここ富山から私たち若い世代がその話を聞き、学び、声を上げていくべきではないだろうか。なぜ日本固有の領土なのに、日本人が住んでいないの

か。北方領土はかけがえのない日本の領土ではないのか。このことを日本人一人一人がしっかりと関心を持ち、学んで行動しなければならぬ。声を出さなければならぬ。SNSの普及により、今は簡単に個人が世界中に声を伝える事はできる。SNSにより一晩で人生が変わる事もあるのだから、若い世代ができる事はたくさんあると思う。ただ、近年のロシアの情勢を見ると、平和的解決は遠い先の日のようにも思える。しかし問題解決の希望はきつとあるはずだ。今の私にできる事は小さな事だろう。それでも私は、北方領土がいつの日か、日本人もロシア人もまた他の国の人と一緒に暮らせる平和な場所になると信じ行動していきたい。

入 選

北方領土問題解決のために

高岡市立福岡中学校 二年 飛田 玲那

私は先日、八月二十三日から二十六日に三泊四日で「北方領土青少年等現地視察事業」に参加しました。そこでの貴重な経験を三つに分けて紹介します。

一つ目は、納沙布岬で北方四島の一つである国後島をこの目で見る事ができたことです。自分が思っていたよりも、ずっと近くにあつて驚きました。また、日本固有の領土なのだ改めて実感しました。

二つ目は、元島民である得能宏さんの講話を聴いたことです。得能さんは、四十年前から語り部活動を開始され、北方領土についての様々な貴重なお話を伝えていってられるそうです。一番私が印象に残ったのは、戦争中、兵に出で四島に戻ろうとすると領土全体がソ連に占拠されていた、ということでした。自分の故郷がある日突然無くなってしまうことは、想像してもしきれないほど辛いことだと思います。もし、私だったら耐えられないかもしれないと感じました。得能宏さんが思う一番効果的な返還運動は、ロシア人とのビザなし交流等の交流活動を通して、「納得」してもらおうことだと話しておられました。私も、平和への近道はお互いのことを知ることだと思いました。得能さんをはじめ、元島民の方々の故郷である北方領土の一日でも早い返還を強く願う経験となりました。

三つ目は、根室市長のお話です。市長は、元島民の方々がいてこそその北方領土問題解決であり、今はコロナ禍で中止となっているロシア人と元島民との交流も切っても切れないものだと言っておられました。また、解決のために

は、国民一人一人が北方領土問題を自分事として捉え、若い世代に北方領土の知識を伝えていくことが大切だと言っておられました。市長のお話では具体的な解決に向けての方法を聞くことができ、貴重な経験となりました。

これらの貴重な経験を通して私の北方領土返還への思いが強くなりました。私はこの事業に参加するまで北方領土問題は、他人事で教科書やニュースで目にする遠いところの話だと思っていました。ですが実際に北海道という地で北方領土について学んでいくうちにだんだんと自分事としてとらえるようになっていきました。いろんな方が言っておられた通り北方領土問題の解決のためには、国民一人一人が問題を自分事としてとらえ、ビザなし交流などの交流活動を通してロシア人に納得してもらうことが必要だと考えました。今後、国民全体の意識が高まっていけば北方領土問題の解決はだんだんと近づいていくと思います。まだ中学生の私には、問題解決に向けてできることは限られています。ですが、それでも今回の事業で学んだことを身の周りの家族や友人に話し北方領土について関心を持ってくれる人を増やしていきたいと思います。そして、皆で北方領土問題に真剣に向き合っていけたら、と思います。

入 選

共生していくためには

射水市立射北中学校 三年 建部 夏希

二〇二二年四月、ロシアの大統領報道官から北方領土について述べられたのは、「四島はロシア固有の領土だ。」ということだった。三月には非友好国として指定され、五月には岸田総理を含む入国禁止リストが発表された。また、共同経済活動として行っていた事業も撤退を発表。つまり、事実上の平和条約締結交渉中断だ。一九九二年から始まったビザなし交流三十周年の年に全てが水の泡になってしまった様だった。戦後七十七年経った今も、北方領土は日本の元へ帰ってきてきてはいない。私たちは一体、何をすべきなのだろうか。

私は八月上旬に北方領土復帰促進青少年少女北海道派遣団の一員として納沙布岬と北方館を訪れた。最初に私の目に映ったのは、ゆらゆらと揺れる祈りの火と奥にぼんやりと見える島、そして海上保安庁の巡視船だった。こんなにも近い距離にある島は日本ではない。そして海上保安庁の巡視船よりも奥に進んでしまえば^だ拿捕・最悪の場合殺されて

しまう。国家間の深い問題が肌で感じられた瞬間だった。その後、北方領土資料館を回った。そこではジオラマに加え、写真なども展示されていた。特に印象に残ったのは「空白の二年間」と名付けられた、ロシア人と日本人の共同生活の様子が写っていた。終戦後、日本人が強制退去させられるまでお互い家族と共に生活していた。言葉や文化の差があるうえ、敵同士という関係だ。そんな相手と生活するなんて不満や恐怖が募るのではないかと思っていた。しかし、写真に写っていた人のほとんどが笑顔を浮かべていた。子供同士、国籍関係なく遊んでいる写真。私は初めて「共生」していた時期があったことを知った。この写真を見て私は、北方領土を返して貰った後のビジョンも考えなくてはならないと思った。

もちろん、北方領土は歴史的にも日本固有の領土であることに変わりはない。しかし、北方領土に住む人を全員追いつ出す必要はあるのだろうか。過去に強制退去させられた元島民の方々と同じ様な思いを、繰り返し必要はあるのだろうか。私は北方領土を正式に日本の領土としたうえでそこに住む人・住みたい人の意思を尊重し、時には共生という選択をすることが大切で必要になると思う。

ではどうすれば実現に繋げられるだろうか。北海道派遣団として活動して、知識が偏っていたり、知識を持っている

「人」が偏っていたりしていると感じた。北方領土返還に向けて歴史の歩みや署名運動を行っていることなど、北方領土を返して貰ううえで大切な情報を知る人が少ない。また「人」が偏っていると前述したが、これは富山県内でも言える話だと思う。北方領土について知識がある、または関連することを調べたことがあるなどの意識の違いが県東部と、私が住む県西部とは格段に違う。北方領土の作文も県東部の中学生が多く応募していることが過去作から読み取れた。

北方領土問題は日本の抱える問題であって、地域によって、人によって知識量が偏るのは良くないことだと思う。だからこそ時代に合わせた方法で知識の差を埋め、さらに深掘りした知識を蓄積すべきだ。今はSNSが普及し、特に私達の様な若い世代が多く利用している。その点を生かして広い世代に知ってもらうことも可能だと思う。また、リモートなどを生かした出前授業や動画サイトを利用し、北方領土に関する知識や体験談を発信していくこともできると思う。政府同士の交渉と共に私達国民の意識を変えていくことが必要不可欠だ。

元島民の方々が一日でも早く、自分のふるさとに帰れるよう、私自身も返還要求運動に今後関わっていき、周りの友人や家族に自分から学んだことを発信して、運動の輪を広げていこうと思う。

「第16回『私たちと北方領土』作文コンクール」入賞者一覧

賞名	題名	名前	市町村名	学校名	学年
富山県知事賞	私にできることは何	水野 桃綺	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
北方領土問題対策協会 理事長賞	北方領土問題を解決しよう！	佐伯 茜音	富山市	片山学園中学校	3年生
北方領土返還要求運動 富山県民会議会長賞	知ることが四島返還への第一歩	佐村木百華	射水市	射水市立射北中学校	3年生
富山県教育委員会 教育長賞	返還までの道	奥村 真衣	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
富山県市長会会長賞	北方領土の為に出来ること	青嶋 沙季	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
富山県「北方領土問題」 教育者会議会長賞	北方領土問題の未来	能登 優奈	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	突然の戦争と四島の返還、私の願い	佐度 春佳	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	北方領土について学んで	島倉 瞳	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	北方領土問題と向き合う	多賀 千咲	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	学び、考えた北方領土返還問題	中陳 由加	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	誰かの故郷	木倉 菜南	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	北方領土への想い	小林 志逢	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	大切な故郷	中 柚希	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	元島民の方々の願いを叶えるために	森下 茜	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	思いをつなぐ役目	島 詩月	魚津市	魚津市立東部中学校	1年生
入 選	北方領土と私	松井 琴音	富山市	片山学園中学校	2年生
入 選	北方領土問題解決のために	飛田 玲那	高岡市	高岡市立福岡中学校	2年生
入 選	共生していくためには	建部 夏希	射水市	射水市立射北中学校	3年生

第16回「私たちと北方領土」作文コンクール

【趣 旨】 北方領土という日本の領土でありながら日本人が自由に往来できない地域があるという現実を中学生が正しく理解し、関心を引き起こすことを目的とする。

【主 催】 北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議

【後 援】 富山県、富山県教育委員会、独立行政法人北方領土問題対策協会、
富山県市長会、富山県町村会

【テーマ】 「北方領土に関すること」（題名は自由）

【応募方法】 (1)対 象 県内の中学校に在学している者
(2)募集期間 令和4年7月～令和4年11月24日
(3)作品規定 原稿用紙（400字詰）3枚～4枚
(4)優秀作品の選定 各中学校において優秀作品10編以内を選定し、提出する。
(5)提 出 先 北方領土返還要求運動富山県民会議
〒930-8501 富山市新総曲輪1-7 富山県経営管理部企画調整課内

【応募状況】

学 校 名	応 募 総 数			
	1 年	2 年	3 年	計
黒部市立清明中学校	0	0	176	176
黒部市立明峰中学校	0	0	175	175
魚津市立東部中学校	1	0	0	1
立山町立雄山中学校	0	0	13	13
富山市立呉羽中学校	0	0	19	19
片山学園中学校	3	6	4	13
高岡市立牧野中学校	5	0	0	5
高岡市立福岡中学校	0	2	0	2
射水市立射北中学校	0	0	4	4
射水市立小杉南中学校	7	6	8	21
合 計	16	14	399	429

【審査内容】

- 審査基準 ①北方領土問題を正しく理解されていることが表現されている、又はそのことがうかがえる。
②北方領土問題を身近な問題として捉え、自らの意見や考えが表現されていること。
③文章の構成や表現力が優れていること。
- 審査結果 26ページに掲載

「富山県北方領土史料室」のご紹介

令和2年9月、北方領土問題の啓発や返還運動の後継者育成につながることを目的に、黒部市に「富山県北方領土史料室」が整備されました。

この施設が、返還要求運動の拠点となり、県内小中学校の校外学習等における活用など、県内外の幅広い世代の皆様にご利用していただきたいと思います。

テーマ① 知る・見る

富山県と北方領土のかかわり
(島の位置、自然 等)

- 富山県と北方領土のかかわり
- 北方領土の歴史
- 北方領土のあらまし(島の位置、自然 等)
- 北方領土マンガの展示
(黒部市出身のマンガ家吉本浩二さん作品)

知ろう!学ぼう!北方領土

3つのテーマごとに、パネルや映像、クイズ、史料などで、富山県と北方領土のかかわりや歴史、あらましなどをわかりやすく紹介しています!

北海道以外では、自治体レベルで初となる北方領土啓発施設

テーマ② 守る・つなげる

ふるさと北方領土の史料の保存・継承

- 北方領土での生活を偲ばせる史料の展示(住民台帳、居住図 等)
- 北方領土の写真の展示(当時・現在)
- ライブ映像放映
(根室市納沙布岬・羅臼国後展望塔から北方領土方面)

3つのテーマごとに、パネルや映像、クイズ、史料などで、富山県と北方領土のかかわりや歴史、あらましなどをわかりやすく紹介しています!

テーマ③ 聞く・学ぶ

北方領土への理解と次世代の育成

- 大型ディスプレイによる映像の上映(元島民インタビュー映像、北方領土の上空映像 等)
- タブレットの設置(北方領土クイズ、電子書籍)
- 学習コーナーの設置(書籍・絵本 等)

ご利用のご案内

- 入 場 料 無料
- 開館時間 9:00～16:30
- 休 館 日 第2日曜日、12月～3月の祝祭日
8月13日～15日、12月29日～1月3日
- 駐 車 場 無料(約70台)
- アクセス



◆あいの風とやま鉄道 黒部駅より車で約10分

◆北陸新幹線 黒部宇奈月温泉駅より車で約15分



◆北陸自動車道 黒部ICより約15分



問合せ先

団体等による見学で、解説が必要な場合は、事前の申込みが必要です。下記までお問い合わせください。

黒部市役所 企画情報課

〒938-8555 富山県黒部市三日市1301
TEL 0765-54-2115 FAX 0765-54-4461

〒938-0072 富山県黒部市生地中區361
黒部市コミュニティセンター内3F
TEL 0765-57-1011 FAX 0765-54-9147



元島民の語る島の思い出

吉田 義久さん（歯舞群島(水晶島)出身）

千島歯舞諸島居住者連盟富山支部（黒部市在住）

私の生まれ育ったふるさとは、根室半島ノサップ岬よりわずか7km、すぐ目の前に見える水晶島という島です。

冬は一面雪と氷におおわれますが、春にはピンクのハマナス、スズラン、黒ユリなど美しい花々が島を埋め尽くし、小鳥がさえずる自然豊かな美しいところでした。島には2つの学校があって、1年から3年のクラスと4年から6年のクラス、高等科の3つのクラスに分けて勉強していました。

米などの農作物はほとんど育たず、仕事はコンブなどの漁業が中心でした。当時、コンブは貴重な食材だったようで、今のお金で3,000～4,000万円位の収入があったと聞いています。

島の生活は楽なものではありませんでした。コンブ漁の最盛期には、朝3時頃から船を出し、夜10時頃まで仕事をしていました。子どもでも、学校を休んで手伝いをしないとイケないのです。私は当時8歳でしたが、コンブを干す海岸の草むしりをして、ハマナスのトゲや貝殻で手を切って、血にまみれたこともありました。

冬の間は、海が氷でおおわれ漁ができないので、富山に帰って身体を養生し、春になったら島に行く人もいましたし、ずっと島で生活する人もいました。

開拓当時の生活は厳しかったようですが、時間が経つにつれ島の生活も安定していきました。漁船も新しく造り替え、これから事業が軌道に乗ろうとしていた矢先、終戦後昭和20年9月3日、ソ連軍が突然、北方四島を占領したのです。私たちは島を追われ、小舟で根室まで引き揚げました。祖父母が血と汗で築いた全財産が、そしてふるさとが、一夜にして奪われてしまったのです。

私は、戦後56年経過した平成13年夏、初めてふるさとの島を訪問しました。夢にまで見たふるさとに足をつけた時、私たちは涙でほほを濡らしました。海岸は大きく浸食されていましたが、草原が一面に広がり、草花が咲き乱れるその光景は昔と少しも変わっていませんでした。

私たち元島民は、先人の血と汗で開拓した北方四島の返還を粘り強く訴えています。誰にも故郷があります。私の故郷は北方領土なのです。日本中の皆さんに、北方領土問題を正しく理解してもらい、「法と正義」に基づいて領土問題が解決されるよう心から願っています。私たちの故郷北方領土が返還されるまで私たちの戦後は終わらないのです。

方四島には船で渡り、現地の学校や企業の視察、日本人墓地の参拝や住民との意見交換などを行っています。

◆ロシアからの訪問

北方四島在住ロシア人による日本への訪問団は、北海道内や日本各地を訪問しています。2018年（平成30年）には、59人のロシア人訪問団が富山県を訪問しました。

富山県を訪れた訪問団は、ホームビジット（一般家庭の訪問）、県内の観光地や企業、文化施設の見学、県内に住む元島民などとの交流会を行っています。

このような交流を通じて、日本人とロシア人が率直な意見を交わすことにより、相互の理解を深めています。



●ホームビジット（2018年10月 富山県）



●ロシア人訪問団との夕食交流会（2018年10月 富山県）

●富山県からの北方四島訪問事業への参加者

年	計	年	計
1993年	2人	2008年	9人
1994年	1人	2009年	3人
1995年	2人	2010年	2人
1996年	1人	2011年	6人
1997年	3人	2012年	4人
1998年	7人	2013年	19人
1999年	34人	2014年	3人
2000年	3人	2015年	3人
2001年	1人	2016年	1人
2002年	9人	2017年	3人
2003年	8人	2018年	6人
2004年	9人	2019年	25人
2005年	4人	2020年	—
2006年	20人	2021年	—
2007年	2人	2022年	—
合計		合計	190人

●富山県を訪れた北方四島在住ロシア人訪問団の人数

区分	平成7年6月	平成14年7月	平成16年5月	平成19年10月	平成21年6月	平成30年10月
	成年訪問団	青少年訪問団	成年訪問団	成年訪問団	青少年訪問団	成年訪問団
男性	18人	17人	26人	18人	10人	24人
女性	52人	13人	49人	26人	40人	35人
計	70人	30人	75人	44人	50人	59人



北方四島との交流事業

領土問題を解決するためには、日本とロシアの国民がお互いに親近感を持ち、領土問題についての正しい理解を深めることが大切です。

そのため、1992年（平成4年）から、日本人と北方四島在住ロシア人とが相互に渡航して交流を深める事業が行われています。「パスポート（旅券）・ビザ（査証）」なしでの渡航が認められているので、「ビザなし交流」と呼ばれています。

日本からは元島民やその家族、返還運動の関係者や文化・社会等の各分野の専門家などのほか、教育関係者や中学生なども北方四島を訪問しています。

2022年（令和4年）までの31年間で、北方四島を訪問した日本人は14,356人、北方四島から日本を訪れたロシア人は10,132人、計24,488人の相互訪問が実現しています。

◆富山県からの訪問

北方領土と関わりの深い富山県は、毎年、積極的に交流に参加しています。富山県から交流事業に参加して北方四島を訪問した人は、2022年（令和4年）までに、延べ190人います。北



●日本人墓地参拝（色丹島）



●獅子舞による交流



●万華鏡作り

◆富山県民会議

富山県内では民間団体が独自に活発な返還要求運動を行ってきましたが、それらの活動を結集し、行政と一体となった返還要求運動を全県的に展開しようという気運が高まり、1982年（昭和57年）1月、「北方領土返還要求運動富山県民会議」が設立されました。

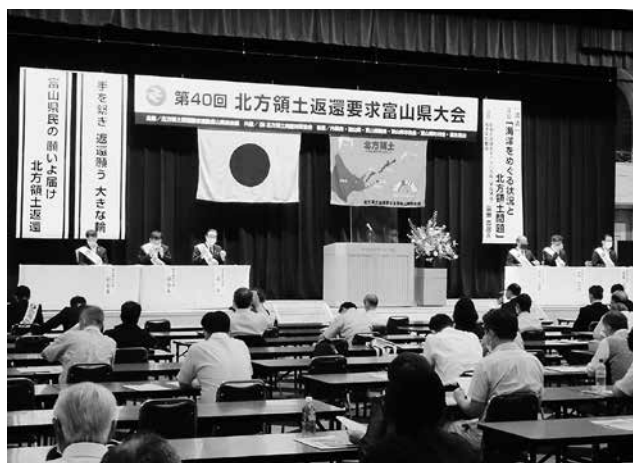
富山県民会議では、県民世論を盛り上げ、北方領土の早期返還を図るため、会員団体と協力し、「北方領土返還要求富山県大会」や2月7日「北方領土の日」記念事業など、さまざまな活動を行っています。また、2020年（令和2年）9月には、北方領土問題の啓発や返還運動の後継者育成、史料の保存・継承を図るため、「富山県北方領土史料室」を開館しました。

◆教育者会議

児童生徒の北方領土への理解と関心を深めるため、2003年（平成15年）、県内の小中学校の教諭が中心となり「富山県『北方領土問題』教育者会議」が設立されました。

教育者会議では、北方領土教育充実のための教材作成や授業研究などに取り組んでいます。

2007年（平成19年）からは、県内の中学生を対象とした『私たちと北方領土』作文コンクール』を、2017年（平成29年）からは、県内の中学校を巡回する北方領土パネル展を実施しています。



●8月「北方領土返還要求富山県大会」



●富山県北方領土史料室



●「私たちと北方領土」作文コンクール表彰式



富山県における返還運動

◆千島連盟富山支部

富山県では、県内に住む元島民が、1961年（昭和36年）に「千島歯舞諸島居住者連盟富山支部」を結成し、早くから返還要求運動が進められました。千島連盟富山支部では、会員の元島民が県内各地の学校などで、島での思い出や返還への想いについて話す「出前講座」を開催しています。



●千島連盟富山支部 元島民による解説

◆復帰促進協議会

1969年（昭和44年）から1970年（昭和45年）ごろに、北洋漁場で日本の漁船がソ連にだ捕される事件が相次いだため、1970年に、富山県の漁業団体と沿岸市町村が抗議に立ち上がり、「北方領土復帰促進北洋安全操業富山県実行委員会」を結成しました。1979年（昭和54年）に「富山県北方領土復帰促進協議会」に改称し、ニューヨークの国連本部へ北方領土返還実現を要望するなどの運動を展開しました。

また、他都府県に先がけて、1970年から毎年、中学生を北海道へ派遣しています。2022年（令和4年）で第53回を数え、これまで中学生384人が納沙布岬から北方領土を望見しました。



●北方領土復帰促進北洋安全操業
富山県大会パレード（1970年 黒部市）



●復帰促進協議会
「少年少女北海道派遣団」結団式

条件で干場の権利を借りることができたのです。

島の住民が北方領土から引き揚げた後に居住した場所を市町村別にみると、ほとんどが黒部市と入善町に集中しており、9割以上を占めています。黒部市では生地地区、入善町では芦崎地区に、多くの人引き揚げてきました。地域的には、黒部川の河口をはさんだ沿岸地域に集中しています。次いで、魚津市の経田地区が多く、その他では、滑川市や射水市にも元島民がいます。

黒部市出身者は、志発島を中心に多楽島や水晶島など歯舞群島の全域に広く分布していました。それに対し、入善町出身者は、志発島へ集中的に渡っていました。

島に渡った時期ですが、歯舞群島では、大正時代の中ごろから1935年(昭和10年)までに多くの世帯が渡島しました。

●富山県内の引揚者分布状況

黒部市	入善町	魚津市	その他	計
835	488	78	24	1,425

富山県への引揚者数(元島民)は1,425人でしたが、すでに900人以上が、ふるさとの島へ帰ることなく、無念のうちに亡くなられ、令和4年3月末現在は452人となっています。

富山県は北海道に次いで北方領土からの引揚者が多いんだね。

滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	海外
5	5	42	26	4	3	2	1	7	12	0	0	4	1	0	3	0	2	2	7	3	1	0	21

◆北方領土に渡った富山県民の人数

第二次世界大戦終了後、北方領土を占領したソ連軍は、島の住民を強制的に立ち退かせました。その際に、北方領土から富山県に引き揚げてきた人数は、1,425人だったとみられています。

引き揚げてきた人々が住んでいた島をみると、歯舞群島と色丹島に集中しています。とりわけ、歯舞群島から多くの人々が引き揚げてきました。

富山県人が歯舞群島に集中した理由としては、歯舞群島が北海道本島の根室に比較的近い島であるため、1877年（明治10年）以降から根室に行っていた富山県人によって開拓されていたことが考えられます。

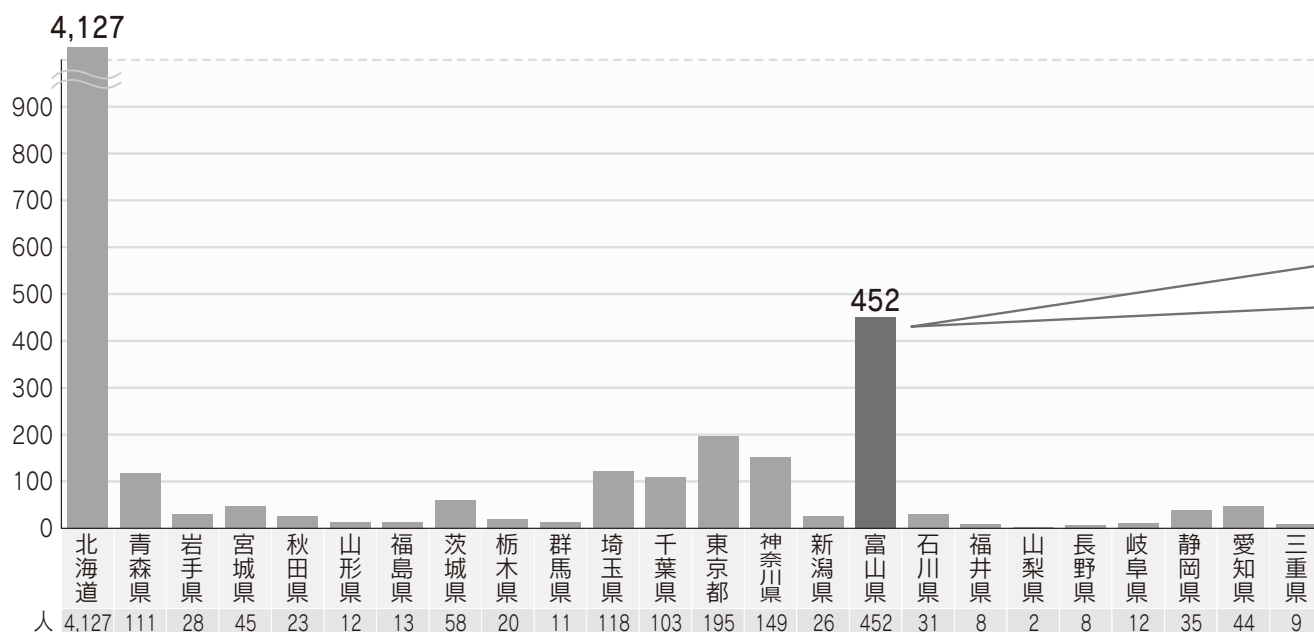
歯舞群島でコンブ採取や漁業を行うためには、コンブの干場の権利を持ち、根室または歯舞の漁業組合の組合員であることが必要でした。富山県からきた出稼ぎ者は、根室や島にいた富山県出身の親方（網元）から、有利な

●北方領土からの島別引揚者数（富山県関係）

志発島	多楽島	水晶島	勇留島	色丹島	計
746	330	221	59	69	1,425

志発島、多楽島、水晶島、勇留島は全て、歯舞群島に含まれます。

●北方領土の元島民数 令和4年(2022年)3月末現在数



◆コンブ漁

歯舞群島や色丹島の住民のほとんどは、コンブ漁に従事していました。

コンブ漁の仕事は、厳しく大変なものでした。朝は5時ごろから始まり、夜は月が高く上るまで家族全員が働くのです。子どもたちも手伝いました。島ではたくさんのコンブが採れ、全国に運ばれました。富山県から島に渡った人々は、持ち前の粘り強さを発揮してコンブ漁を盛んにしていきました。

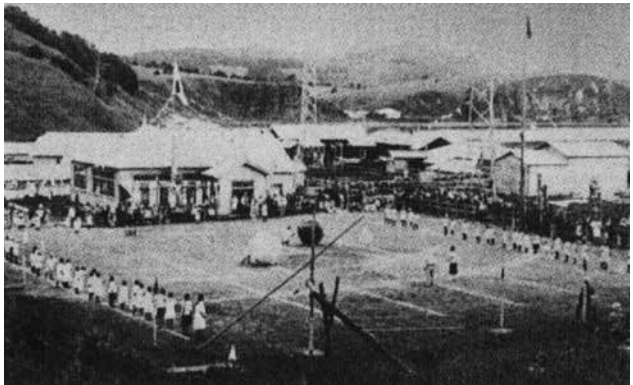
島ではジャガイモなどは採れましたが、米はほとんど育たず、米、みそ、しょう油などの品物は、富山県から送ってもらっていました。

島では、小学校の運動会や学芸会、神社の祭礼などが大変にぎやかに行われ、ほとんどの人が仕事を休んで集まり、楽しい一日を過ごしたそうです。

冬は、海が雪と氷でおおわれてしまい、コンブ漁ができない上に、寒さが厳しいので、富山県に帰って体を休め、春になってから島へ戻る人たちもいました。富山県から島までは、鉄道と船を乗り継いで1週間以上かかりました。



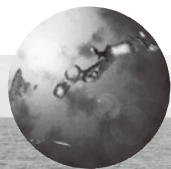
●コンブ干しの風景（国後島）



●小学校での運動会（色丹小学校／色丹島）



●お祭りの光景（国後島）



富山県と北方領土とのががわり

富山県は、北方領土からの引揚者が北海道に次いで多い県です。

越中（富山県）と蝦夷地（北海道）とは、すでに江戸時代には交流がありました。北前船で日本海側を通る西廻り航路により、蝦夷地から大量のコンブが大阪に運ばれていました。その航路は「コンブロード」と呼ばれていました。富山は、「コンブロード」の中継地として発展していたのです。

また、当時の富山県を治めていた加賀藩は、漁師の出稼ぎを奨励していました。代々、神通川以東の33カ村の浦方十村（漁村の大庄屋）であった田村家の7代目である田村前名が、1818年（文政元年）に遠洋漁業を広めたとの記録も残っています。

1874年（明治7年）には、生地村（現在の黒部市内）の人々が北海道へ出稼ぎに行き、大きな利益を得たため、それ以降、出稼ぎに行く人々が増えていったとのことでした。

明治の終わりごろになると、富山県では、漁業不振と高波や火災による災害のため、漁師の生活は苦しいものになっていました。そのため、新しい漁業の場を求めて、すでに北海道の根室や羅臼で漁業経営者になっていた富山県出身者を頼って、大勢が出稼ぎに行きました。彼らは、「富山からの出稼ぎ者は、真面目によく働く」と言われ歓迎されたそうです。漁師たちは、歯舞群島にも渡り、自然や生活環境が厳しい中、コンブの漁場を開拓していきました。良質なコンブがたくさん採れ、多くの人々が豊かな生活を手に入れました。

大正時代になると、富山県から歯舞群島や色丹島に移り住む人も増え、「越中村」と呼ばれる村ができるくらいでした。

このように、根室や歯舞群島の漁場、とりわけコンブの漁場は、富山県の先人によって開拓され、発展したと言っても過言ではありません。北方領土へ渡った人々が支えたコンブは、現在の富山の食文化にも深く関わっています。



◆返還運動のひろがり

北方領土の返還を求める人たちの間から、返還運動を一層推進するため、「北方領土の日」を制定したいという要望が高まり、1981年（昭和56年）、政府は2月7日を「北方領土の日」とすることを決定しました。

1855年（安政元年）の2月7日は、日本とロシアの間で最初に国境の取り決めが行われた「日魯通好条約」が結ばれた歴史的に大きな意義を持つ日です。

毎年、「北方領土の日」には、東京で「北方領土返還要求全国大会」が、内閣総理大臣、衆・参両院議長、各政党代表、民間団体代表などの出席のもとに開催されます。全国各地でも、この日を中心に、大会やパネル展、講演会などの行事が行われます。

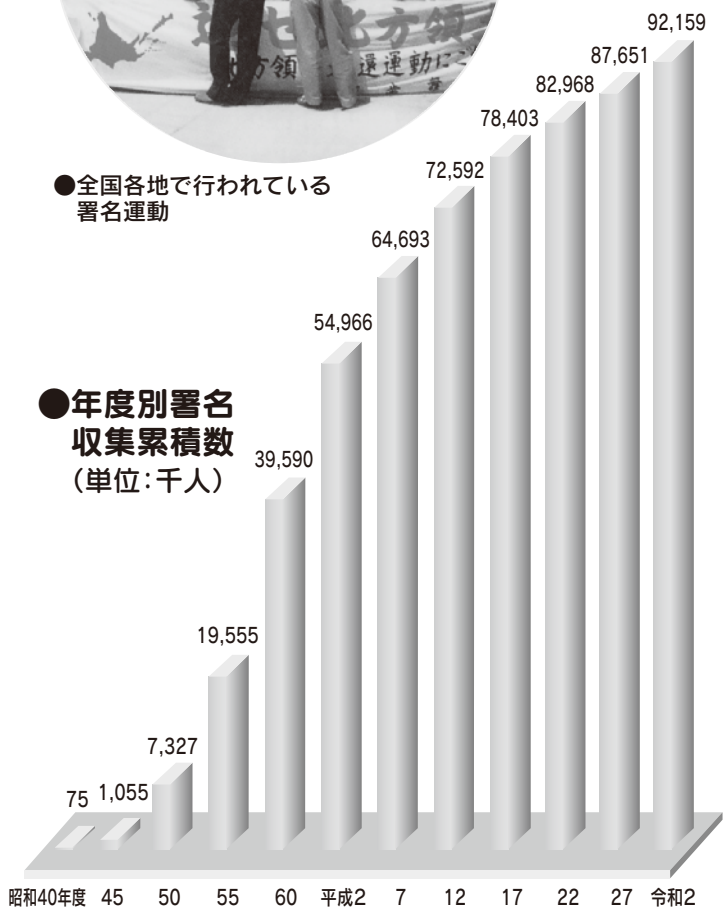
また、国民が北方領土返還を求めている意志を表明する手段として、署名活動が行われています。多くの人たちから寄せられた署名は、令和3年度末現在で9,278万人を超えています。



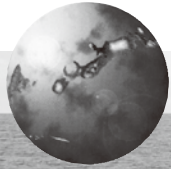
●北方領土返還要求全国大会（挨拶する岸田総理大臣）
出典：首相官邸ホームページ



●全国各地で行われている署名運動



●年度別署名収集累積数
(単位：千人)



どうしたら北方領土は還ってくるの？

◆北方領土返還運動のあゆみ

北方領土問題を解決するためには、ロシアとの外交交渉を粘り強く続けることが必要です。こうした交渉を支えるのは、返還を求める国民の一致した世論と強い支持です。

北方領土の返還を求める声は、第二次世界大戦終了後まもなく、北海道の根室にあがりましました。当時の安藤石典根室町長は、ソ連によって島から追われた人たちの援護に全力をあげるばかりでなく、当時の日本を占領していた連合軍最高司令官であるマッカーサー元帥あてに、北方領土返還を求める陳情書を出しました。これが、返還要求運動の始まりとされています。

根室であがった返還要求の声は、やがて北海道の各地にこだまし、運動の輪は全国に広がりました。多くの民間団体が返還運動に取り組み、運動の基盤となる都道府県単位の組織が設立されていきました。北方領土返還の実現を目指した運動は、全国各地で大きく展開されるようになっていくのです。



●北方領土復帰要請陳情書第1号



●全国縦断キャラバン隊の要望書を総理大臣へ伝達



●国際シンポジウム2004（富山会場）



日口間の最近の動きはどうなっているの？

1991年（平成3年）にソ連が崩壊し、ロシアが誕生しました。日本とロシアの間でも、領土問題を解決し、平和条約を締結するための外交交渉が粘り強く続けられています。

1993年（平成5年）に合意された「東京宣言」では、領土問題を北方四島の帰属の問題と位置づけるとともに、領土問題解決のための交渉指針が示されました。

2000年（平成12年）、ロシアではプーチン政権が誕生し、2003年（平成15年）には「日口行動計画」が採択され、領土問題に関しては「日ソ共同宣言」や「東京宣言」などの諸合意を基礎に交渉を加速させることが確認されました。

2016年（平成28年）には、安倍総理大臣とプーチン大統領との間で、これまでの交渉の停滞を打破して突破口を開くため、今までの発想にとらわれない「新しいアプローチ」で交渉を精力的に進めていく認識が共有され、北方四島において特別な制度の下で共同経済活動を行うための協議の開始が合意されました。

また、2018年（平成30年）11月に行われた日口首脳会談では、「日ソ共同宣言」を基礎として平和条約交渉を加速させることが合意されました。



●東京宣言に署名する細川総理大臣とエリツィン大統領（1993年）



●日口行動計画に関する共同声明に署名する小泉総理大臣とプーチン大統領（2003年）



●日口首脳会談（2018年11月14日）
出典：首相官邸ホームページ

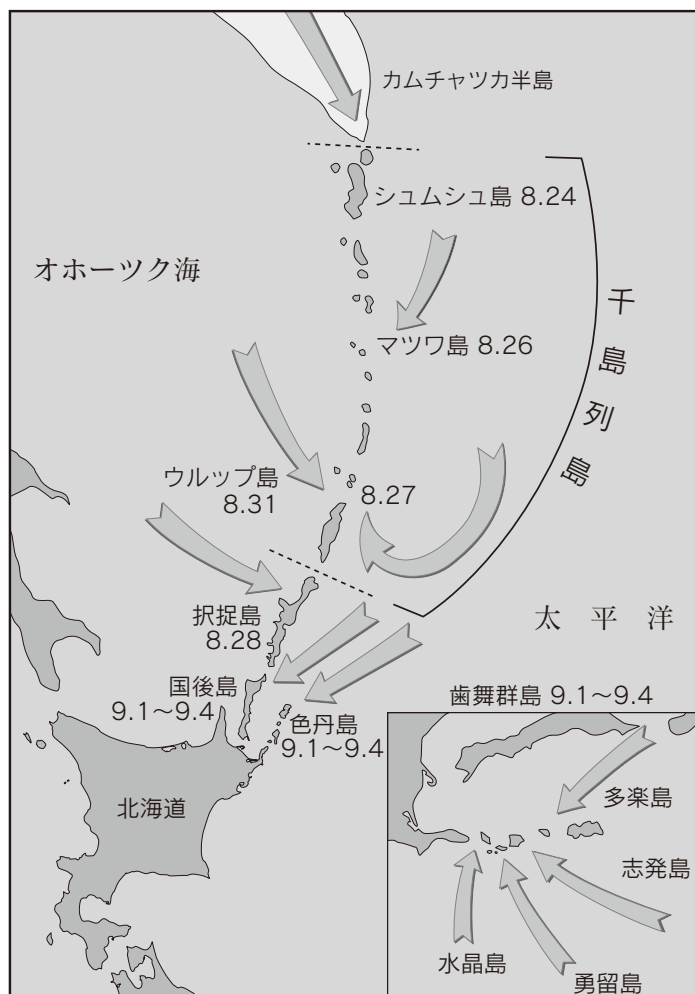
第二次世界大戦末期の1945年（昭和20年）8月9日、ソ連は当時有効だった「日ソ中立条約」（1941年締結）を一方的に破棄して、日本に対し宣戦しました。ソ連軍は、第二次世界大戦終了後の8月18日より千島列島への攻撃を開始し、8月28日に択捉島に上陸、次いで国後島、色丹島、歯舞群島と、遅くとも9月5日までに、これら四島をすべて占領してしまいました。

その後、現在まで、これら北方四島は、ソ連（現在のロシア）に不法占拠された状態が続いています。

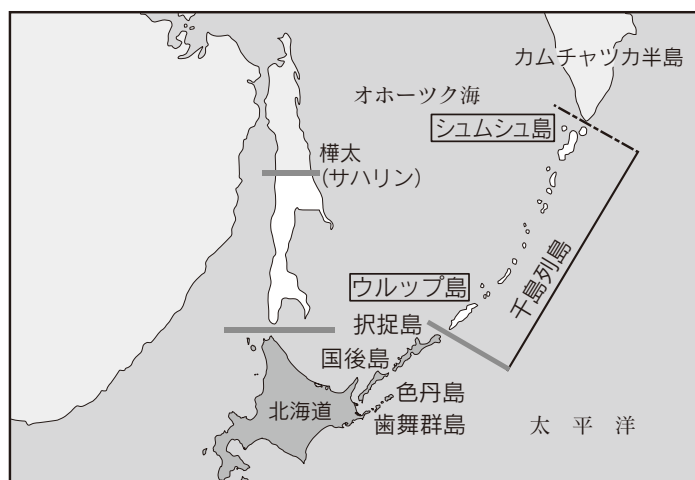
1951年（昭和26年）、日本は「サンフランシスコ平和条約」に調印し、千島列島と南樺太を放棄しました。このとき、日本が放棄した千島列島とは、ウルップ島から北の島々のことで、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は含まれていません。

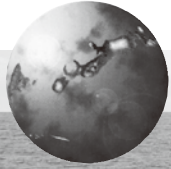
ソ連が「サンフランシスコ平和条約」に加わらなかったため、日本とソ連は、1956年（昭和31年）、「日ソ共同宣言」に署名し、国交を回復しました。「日ソ共同宣言」では、領土問題について、平和条約締結後に、歯舞群島と色丹島を日本に引き渡すことに同意しています。

●ソ連の不法占領



●1951年のサンフランシスコ平和条約に基づく国境線





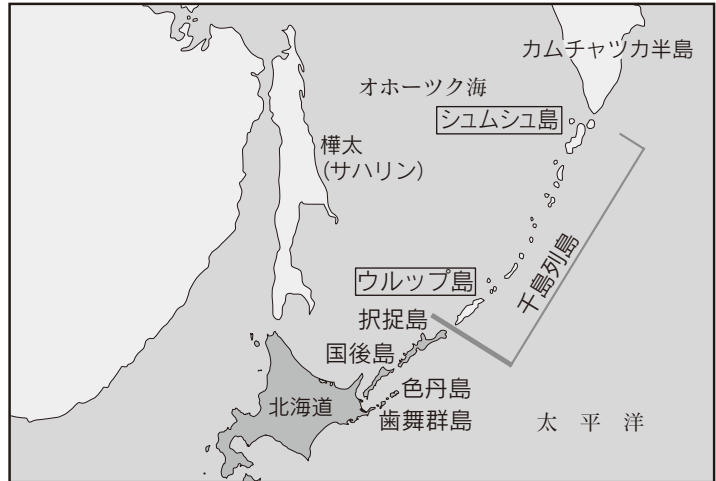
北方領土の国境はどうなっているの？

1855年（安政元年）、日本とロシアの間で「日魯通好条約」が結ばれました。この条約で、両国の国境が択捉島とウルップ島の上に定められました。ウルップ島から北の千島列島はロシアの領土、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は日本の領土であることが、この条約によって法的に確定したのです。このとき、樺太(サハリン)については、国境は決めませんでした。

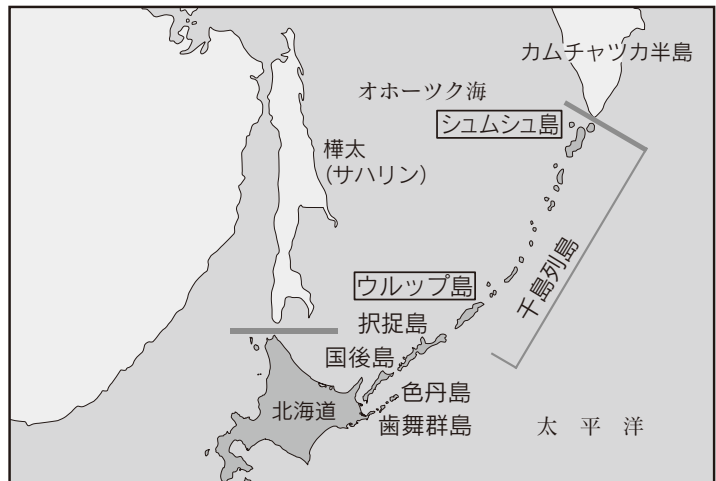
1875年（明治8年）、日本はロシアと「樺太千島交換条約」を結びました。日本は樺太での権利を放棄するかわりに、千島列島をロシアから譲り受けたのです。この条約には、譲り受ける千島列島として、シムシユ島からウルップ島までの18の島の名前が挙げられています。つまり、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は、千島列島には含まれないということなのです。

1905年（明治38年）、日露戦争の結果、日本とロシアは「ポーツマス条約」を結びました。このとき、樺太の南半分が日本の領土となりました。

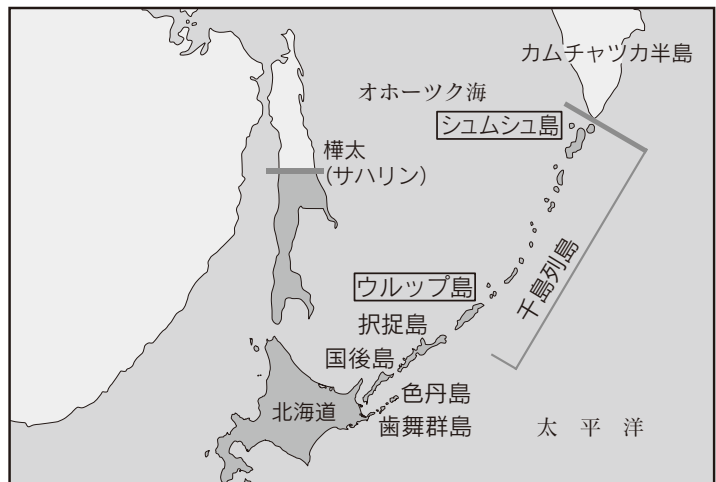
●1855年の日魯通好条約に基づく国境線

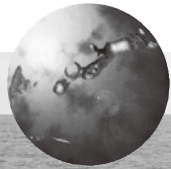


●1875年の樺太千島交換条約に基づく国境線



●1905年のポーツマス条約に基づく国境線





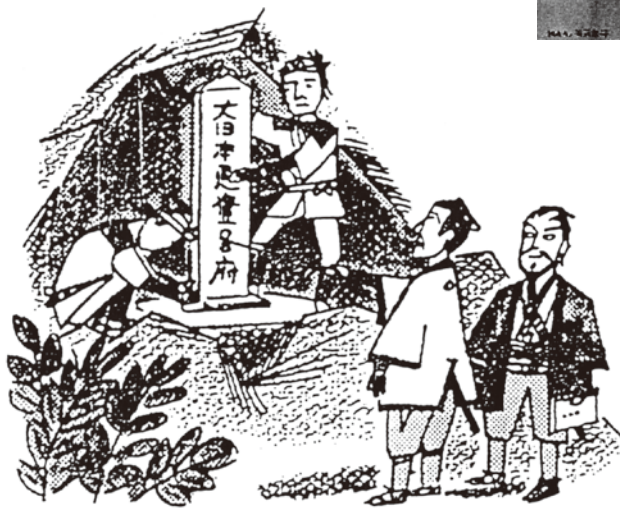
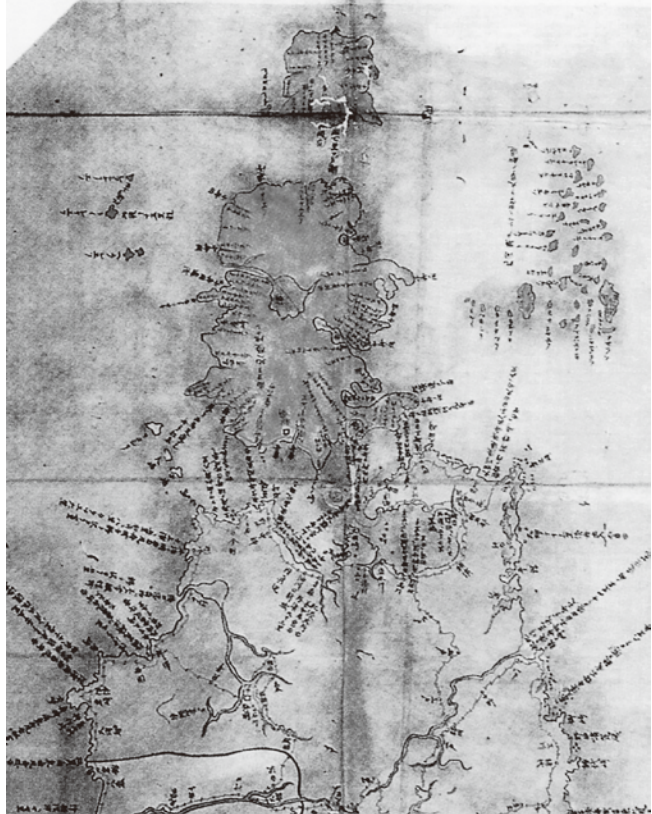
北方領土は日本の島なの？

日本が、北方の島々のことを知ったのは、17世紀初め頃です。

1644年（^{しょうほ}正保元年）に江戸幕府が「^{しょうほ}正保御国絵図」という地図を編さんしましたが、このとき松前藩が幕府に提出した自藩領地の地図には「くなしり」「えとろほ」など、現在の島名と同じ名前が書かれています。

ロシア人が初めて千島列島を^{しょうとく}探検したのが1711年（正徳元年）のことですから、約100年も前から日本は北方の島々とかかわりをもっていたのです。

●正保御国絵図1644年（正保元年）



18世紀後半になると、国後島、^{もがみとくない}択捉島を中心に、最上徳内、^{たかだやかへえ}高田屋嘉兵衛、^{こんどうじゅうぞう}近藤重蔵といった日本人が活躍しました。

江戸幕府は1798年（^{かんせい}寛政10年）、蝦夷地（北海道）に大規模な調査隊を派遣しました。このとき、近藤重蔵が最上徳内とともに^{だいにっぽんえとろ}択捉島に渡り、「大日本恵登呂

^ふ府」と書いた標柱を建て、日本の領土であることを明らかにしました。

このような歴史的事実や当時の実情から考えても、北方領土は古来からの日本の領土なのです。

◆北方四島での人々の生活

第二次世界大戦終了後、ソ連軍に占領されるまで、北方四島には日本人が住んでいました。

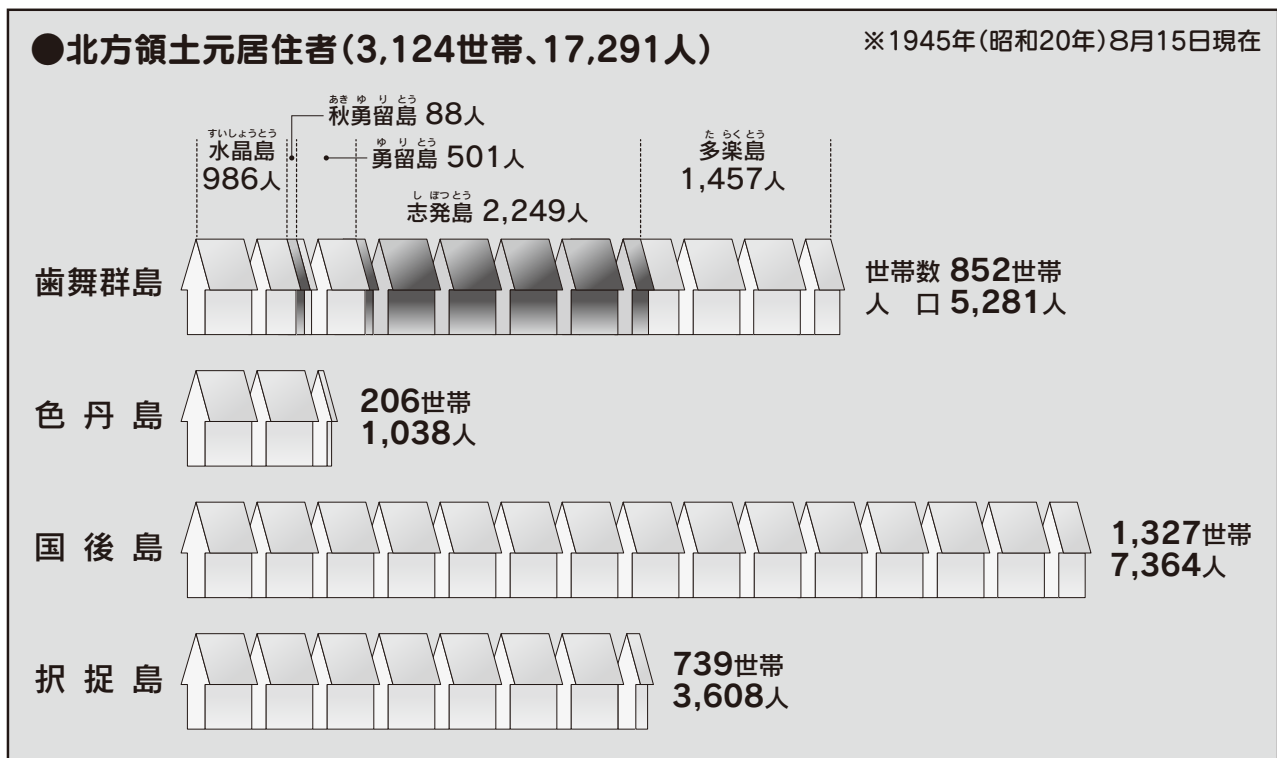
北方四島の住民のほとんどは、漁業に従事していました。はじめは親方（網元）に雇われていた人が多かったのですが、やがて独立して、家族とともに移り住むようになっていったのです。

島での住宅は、ほとんどが木造であり、風が強い土地であったことから平屋造りで小さなものでした。

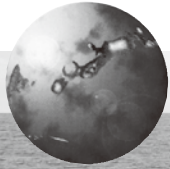
日常生活に必要なものの大部分は、船で北海道本島から運ばれてきました。そのため、輸送費がかかり、島での物価は高かったといわれています。その上、冬の間は暴風や流氷でしばしば船が来なくなり、新聞や郵便物のほか、日常の品の運搬も長くとだえることがありました。そのため、島では、食料などの必要な品物は、翌年の春までの分を秋のうちに買い入れておきました。

最も困るのは、急病人やけが人が出た時でした。島には、医者も病院も少なく、設備も整っていませんでした。そのため、急病人の手当が間に合わないことも多くありました。

このように、島での生活は、不便なことや困難なことも多かったのですが、豊かな漁場や森林などに恵まれていたため、生活は次第に豊かになっていきました。島をふるさとと決めた人々は、将来に明るい希望を持って、一生懸命に働きました。



注：平成18年3月千島歯舞諸島居住者連盟調べ



北方領土ってどんな島なの？

北方領土の中でも、国後島と択捉島には、海拔1,500mを超える山がありますが、歯舞群島と色丹島は、ゆるやかな起伏のある土地です。

北方領土には、キタキツネ、ゴマフアザラシ、オットセイ、トドなどたくさんの動物が住んでいます。国後島や択捉島には、ヒグマも住んでいます。また、エトピリカ、エゾライチョウ、オジロワシといった珍しい鳥も多く見かけます。

北方領土の周辺の海は、暖流と寒流が交わる場所であるため、世界3大漁場のひとつとなっています。特に、サケ、マス、タラ、タラバガニ、コンブ、ホタテなどの宝庫です。

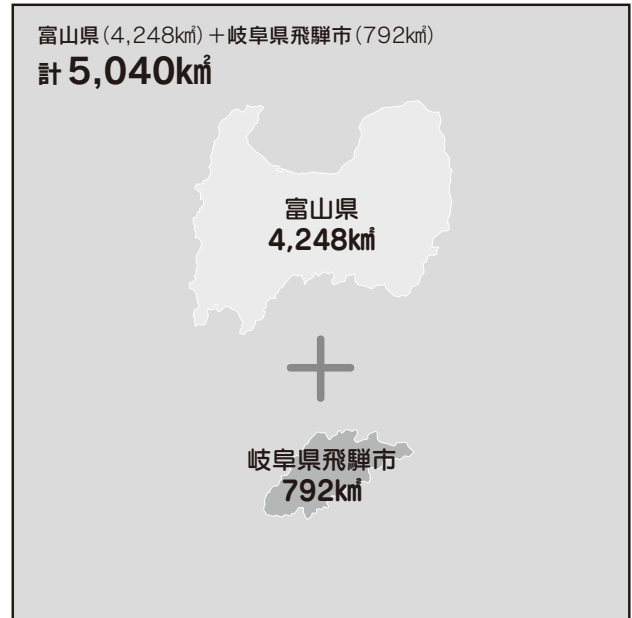
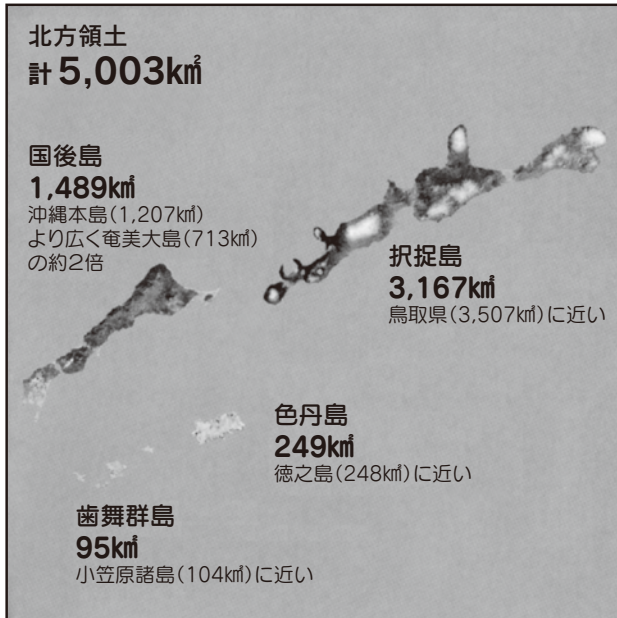


北方領土というと、厳しい寒さを想像するかもしれませんが、海流の影響のため、冬は北海道の内陸部より暖かく、雪も少ない場所です。2月の平均気温は、マイナス6℃前後です。

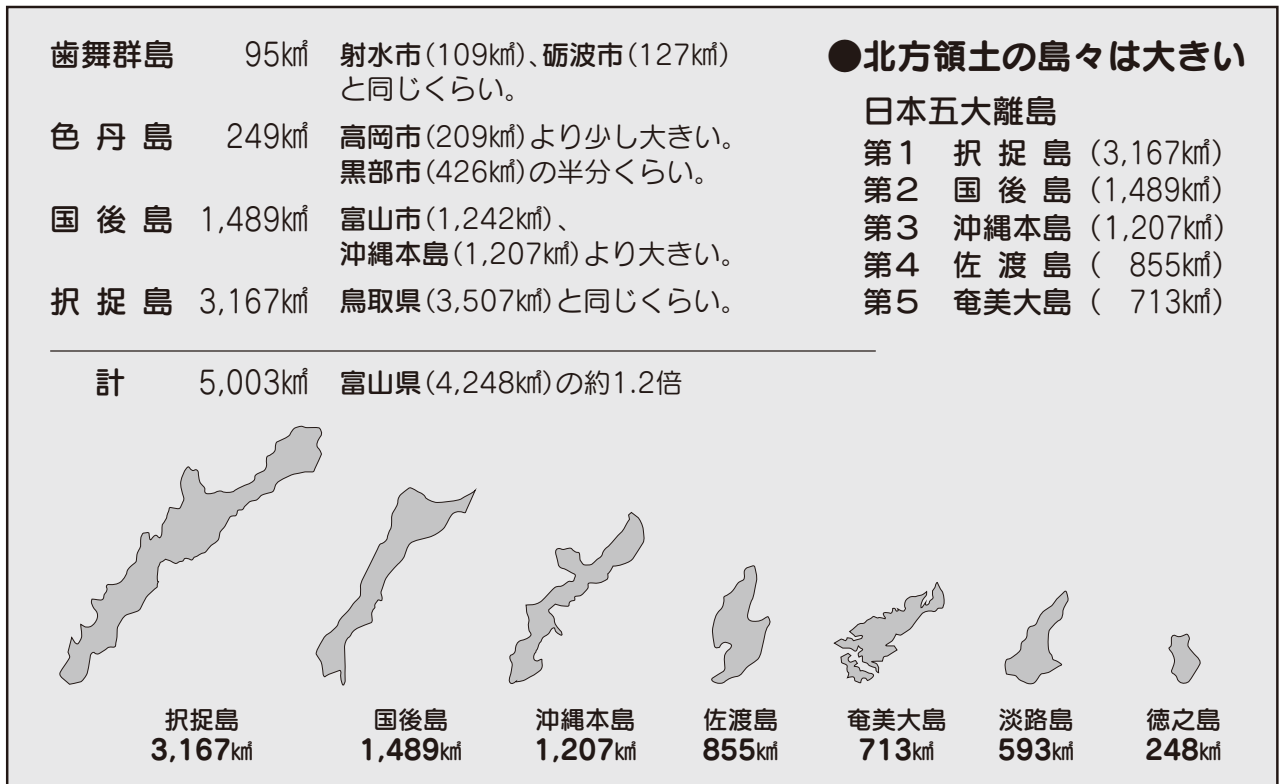
夏は、一番暑い8月でも月の平均気温が16℃で、あまり高くありません。夏は、海霧（ガス）がかかって日照時間が少ないことや、オホーツク海から冷たい空気が入ってくるからです。

◆北方領土の面積について

北方領土の面積の総計は、5,003km²で、富山県の面積(4,248km²)の約1.2倍の広さです。国後島と択捉島は、沖縄本島より大きな島で、一番大きな択捉島(3,167km²)は鳥取県(3,507km²)と同じくらいの広さです。



北方領土の面積を日本各地の島々や県・市の大きさと比較してみましょう。





北方領土ってどこにあるの？

◆北方領土の位置について

「北方領土」とは、北海道の東にある根室半島につらなるはぼまいぐんとう歯舞群島、しこたんとう色丹島、くなしりとう国後島、えとろふとう択捉島の4つの島々のことです。これらの島々は「北方四島」とも言います。

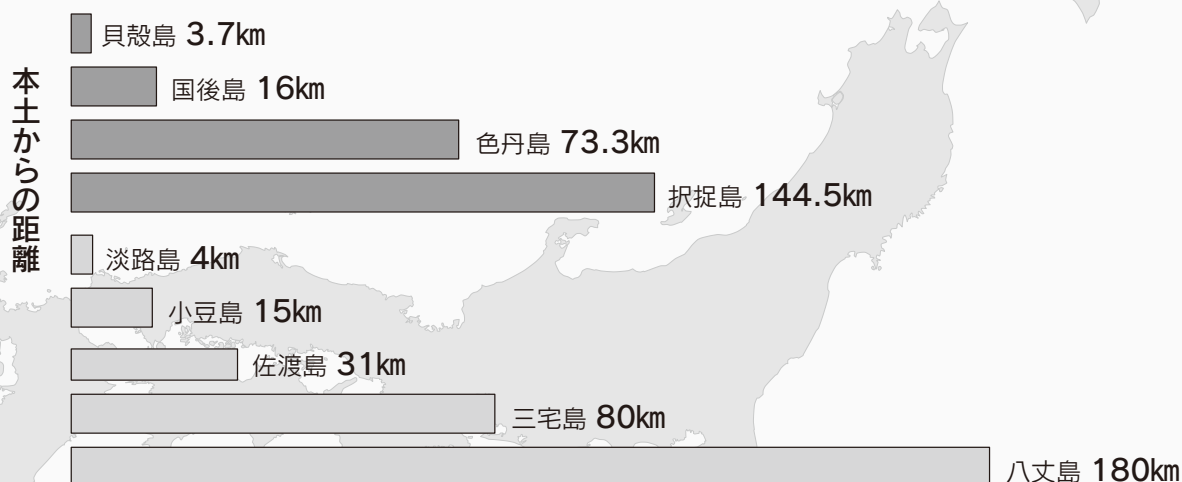
北方領土はとても遠い場所だと思っているかもしれませんが、最も近い歯舞群島の貝殻島までは、北海道本島からわずか3.7kmしか離れておらず、望遠鏡で灯台をはっきり見ることができます。

また、国後島までは16kmで、本土と佐渡島との距離（31km）の約半分です。色丹島までは73.3km、択捉島までは144.5kmという距離です。北方領土とはこんなに近くにある島々なのです。



●こんなに近い北方領土

最も近い歯舞群島の貝殻島は、納沙布岬からわずか3.7km、一番遠い択捉島までは144.5kmです。



參考資料

第16回「私たちと北方領土」作文コンクール入賞作文集

令和5年3月発行

編集・発行 北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議
(富山県経営管理部企画調整課内)
富山市新総曲輪1-7 ☎076-431-4111(代表)

印刷所 株式会社すがの印刷
